

# 茶の本

茶の本

岡倉覚三

青空文庫



## 目次

## 第一章 人情の碗

茶は日常生活の俗事の中に美を崇拝する一種の審美的宗教すなわち茶道の域に達す——茶道は社会の上下を通じて広まる——新旧両世界の誤解——西洋における茶の崇拝——欧州の古い文献に現われた茶の記録——物と心の争いについての道教徒の話——現今における富貴権勢を得ようとする争い

## 第二章 茶の諸流

茶の進化の三時期——唐とう、宋そう、明みんの時代を表わす煎せん茶、抹ひき茶、淹だし茶——茶道の鼻祖陸羽——三代の茶に関する理想——後世のシナ人には、茶は美味な飲料ではあるが理想ではない——日本においては茶は生の術に関する宗教である

## 第三章 道教と禅道

道教と禅道との関係——道教とその後継者禅道は南方シナ精神の個人的傾向を表わす——道教は浮世をかかるとあきらめて、この憂うき世の中にも美を見いだそうと努

める——禅道は道教の教えを強調している——精進静慮することによつて自性了解の極致に達せられる——禅道は道教と同じく相對を崇拜する——人生の些事さじの中にも偉大を考ふる禅の考え方が茶道の理想となる——道教は審美的理想の基礎を与へ禅道はこれを実際的なものとした

#### 第四章 茶室

茶室は茅屋ぼうおくに過ぎない——茶室の簡素純潔——茶室の構造における象徴主義——茶室の裝飾法——外界のわずらわしさを遠ざかつた聖堂

#### 第五章 芸術鑑賞

美術鑑賞に必要な同情ある心の交通——名人とわれわれの間の内密の默契——暗示の価値——美術の価値はただそれがわれわれに語る程度による——現今の美術に対する表面的の熱狂は眞の感じに根拠を置いていない——美術と考古学の混同——われわれは人生の美しいものを破壊することによつて美術を破壊している

#### 第六章 花

花はわれらの不断の友——「花の宗匠」——西洋の社会における花の浪費——東洋の花卉栽培かきさいばい——茶の宗匠と生花の法則——生花の方法——花のために花を崇拜すること

——生花の宗匠——生花の流派、形式派と写実派

第七章 茶の宗匠

——茶の宗匠の芸術に対する貢献——処世上に及ぼした影響——利休の最後の茶の湯

注



茶の本





## 第一章 人情の碗

茶は薬用として始まり後飲料となる。シナにおいては八世紀に高雅な遊びの一つとして詩歌の域に達した。十五世紀に至り日本はこれを高めて一種の審美的宗教、すなわち茶道にまで進めた。茶道は日常生活の俗事の中に存する美しきものを崇拜することに基づく一種の儀式であつて、純粹と調和、相互愛の神秘、社会秩序のローマン主義をじゅんじゅん諄々じゅんじゅんと教えるものである。茶道の要義は「不完全なもの」を崇拜するにある。いわゆる人生といふこの不可解なものの中に、何か可能なものを成就しようとするやさしい企てであるから。茶の原理は普通の意味でいう単なる審美主義ではない。というのは、倫理、宗教と合して、てんじん天人てんじんに関するわれわれのいつさいの見解を表わしているものであるから。それは衛生学である、清潔をきびしく説くから。それは経済学である、というのは、複雑なぜいたくというよりもむしろ単純のうちに慰安を教えるから。それは精神幾何学である、なんとすれば、宇宙に対するわれわれの比例感を定義するから。それはあらゆるこの道の信者を

趣味上の貴族にして、東洋民主主義の真精神を表わしている。

日本が長い間世界から孤立していたのは、自省をする一助となつて茶道の発達に非常に好都合であつた。われらの住居、習慣、衣食、陶漆器、絵画等——文学でさえも——すべてその影響をこうむつている。いやしくも日本の文化を研究せんとする者は、この影響の存在を無視することはできない。茶道の影響は貴人の優雅な閨房けいぼうにも、下賤げせんの者の住み家にも行き渡つてきた。わが田夫は花を生けることを知り、わが野人も山水を愛めでるに至つた。俗に「あの男は茶氣ちやきがない」という。もし人が、わが身の上におこるまじめながらの滑稽こっけいを知らないならば。また浮世の悲劇にとんじやくもなく、浮かれ氣分はんかで騒さわぐ半可通こつうを「あまり茶氣があり過ぎる」と言つて非難する。

よその目には、つまらぬことをこのように騒さわぎ立てるのが、実に不思議に思われるかもしれぬ。一杯のお茶でなんという騒さわぎだろうというであろうが、考えてみれば、煎せんずるところ人間享樂の茶碗ちやわんは、いかにも狭いものではないか、いかにも早く涙であふれるではないか、無辺を求むる渴かわきのとまらぬあまり、一息に飲みほされるではないか。してみれば、茶碗をいくらかもてはやしたとてとがめだてには及ぶまい。人間はこれよりもまだまだ悪いことをした。酒の神バツカスを崇拜するのあまり、惜しげもなく奉納をし過ぎた。軍神マ

ーズの血なまぐさい姿をさえも理想化した。してみれば、カメリヤの女皇に身をささげ、その祭壇から流れ出る暖かい同情の流れを、心ゆくばかり楽しんでよいではないか。象牙色うげいろの磁器にもられた液体琥珀こはくの中に、その道の心得ある人は、孔子こうしの心よき沈黙、老子らうしの奇警、釈迦牟尼しやくあむにの天上の香にさえ触れることができる。

おのれに存する偉大なるものの小を感ずることのできない人は、他人に存する小なるものの偉大を見のがしがちである。一般の西洋人は、茶の湯を見て、東洋の珍奇、稚氣そでをなしている千百の奇癖のまたの例に過ぎないと思つて、袖の下で笑つていよう。西洋人は、日本が平和な文芸にふけていた間は、野蛮国と見なしていたものである。しかるに満州の戦場に大々の殺戮さつりくを行ない始めてから文明国と呼んでいる。近ごろ武士道——わが兵士に喜び勇んで身を捨てさせる死の術——について盛んに論評されてきた。しかし茶道にはほとんど注意がひかれていない。この道はわが生の術を多く説いているものである。もしわれわれが文明国たるためには、血なまぐさい戦争の名誉によらなければならぬ。ないとするならば、むしろいつまでも野蛮国に甘んじよう。われわれはわが芸術および理想に対して、しかるべき尊敬が払われる時期が来るのを喜んで待とう。

いつになったら西洋が東洋を了解するであろう、否、了解しようと努めるであろう。わ

れわれアジア人はわれわれに関して織り出された事実や想像の妙な話にしばしば胆きもを冷やすことがある。われわれは、ねずみや油虫を食べて生きているのでないとしても、蓮はすの香を吸って生きていると思われている。これは、つまらない狂信か、さもなければ見さげ果てた逸楽である。インドの心霊性を無知といい、シナの謹直を愚鈍といい、日本の愛国心をば宿命論の結果と行ってあざけられていた。はなはだしきは、われわれは神経組織が無感覚なるため、傷や痛みに対して感じが薄いとまで言われていた。

西洋の諸君、われわれを種にどんなことでも言ってお楽しみなさい。アジアは返礼いたしません。まだまだおもしろい種になることはいくらでもあろう、もしわれわれ諸君についてこれまで、想像したり書いたりしたことがすっかりおわかりになれば。すべて遠きものをば美しと見、不思議に対して知らず知らず感服し、新しい不分明なものに対しては、口には出さねど憤るといふことがそこに含まれている。諸君はこれまで、うらやましく思うこともできないほど立派な徳を負わされて、あまり美しくて、とがめることのできないような罪をきせられている。わが国の昔の文人は——その当時の物知りであつた——まあこんなことを言っている。諸君には着物のどこか見えないところに、毛深いしつぽがあり、そしてしばしば赤ん坊の細切り料理こまぎを食べていると！ 否、われわれは諸君に対してもつ

と悪いことを考えていた。すなわち諸君は、地球上で最も実行不可能な人種と思っていた。というわけは、諸君は決して実行しないことを口では説いているといわれていたから。

かくのごとき誤解はわれわれのうちからすみやかに消え去ってゆく。商業上の必要に迫られて欧州の国語が、東洋幾多の港に用いられるようになって来た。アジアの青年は現代的教育を受けるために、西洋の大学に群がってゆく。われわれの洞察力どうきつりよくは、諸君の文化に深く入り込むことはできない。しかし少なくともわれわれは喜んで学ぼうとしている。私の同国人のうちには、諸君の習慣や礼儀作法をあまりに多く取り入れた者がある。こういう人は、こわばったカラや丈たけの高いシルクハットを得ることが、諸君の文明を得ることと心得違いをしていたのである。かかる様子ぶりは、実に哀れむべき嘆かわしいものであるが、ひざまずいて西洋文明に近づこうとする証拠となる。不幸にして、西洋の態度は東洋を理解するに都合が悪い。キリスト教の宣教師は与えるために行き、受けようとはしない。諸君の知識は、もし通りすがりの旅人のあてにならない話に基づくのでなければ、わが文学の貧弱な翻訳に基づいている。ラフカディオ・ハーンぎぎようてきの義侠的ペン、または『インド生活の組織（一）』の著者のそれが、われわれみずからの感情の松明たいまつをもって東洋の闇やみを明るくすることはまれである。

私はこんなにあけすけに言つて、たぶん茶道についての私自身の無知を表わすであろう。茶道の高雅な精神そのものは、人から期待せられてのことだけ言うことを要求する。しかし私は立派な茶人のつもりで書いているのではない。新旧両世界の誤解によつて、すでに非常な禍をわざわいこうむつているのであるから、お互いがよく了解することを助けるために、いささかなりとも貢献するに弁解の必要はない。二十世紀の初めに、もしロシアがへりくだつて日本をよく了解していたら、血なまぐさい戦争の光景は見ないで済んだであろうに。東洋の問題をさげすんで度外視すれば、なんとという恐ろしい結果が人類に及ぶことである。ヨーロッパの帝国主義は、黄禍のばかげた叫びをあげることゝを恥じないが、アジアもまた、白禍の恐るべきをさとるに至るかもしれないということ、わかりかねている。諸君はわれわれを「あまり茶気があり過ぎる」と笑うかもしれないが、われわれはまた西洋の諸君には天性「茶気がない」と思うかもしれないではないか。

東西両大陸が互いに奇警な批評を飛ばすことはやめにして、東西互いに得る利益によつて、よし物がわかつて来ないとしても、お互いにやわらかい気持ちにならうではないか。お互いに違つた方面に向かつて発展して来ているが、しかし互いに長短相補わない道理はない。諸君は心の落ちつきを失つてまで膨張発展を遂げた。われわれは侵略に対しては弱

い調和を創造した。諸君は信ずることが出来ますか、東洋はある点で西洋にまきついているということをして！

不思議にも人情は今までのところ茶碗ちやわんに東西相合している。茶道は世界的に重んぜられていた唯一のアジアの儀式である。白人はわが宗教道徳を嘲笑ちやうしやうした。しかしこの褐色か飲料いんりやうは躑躅ちゆうちよもなく受け入れてしまった。午後の喫茶は、今や西洋の社会における重要な役をつとめている。盆や茶托ちやたくの打ち合う微妙な音にも、ねんごろにもてなす婦人の柔らかい絹ずれの音にも、また、クリームや砂糖を勧められたり断わったりする普通の問答にも、茶の崇拜は疑いもなく確立しているということがわかる。渋いか甘いかわしい煎茶せんちやの味は、客を待つ運命に任せてあきらめる。この一事にも東洋精神が強く現われているということがわかる。

ヨーロッパにおける茶についての最も古い記事は、アラビヤの旅行者の物語にあると言われている。八七九年以後広東カントンにおける主要なる歳入の財源は塩と茶の税であったと述べてある。マルコポーロは、シナの市舶司が茶税を勝手に増したために、一二八五年免職になったことを記録している。ヨーロッパ人が、極東についていっそう多く知り始めたのは、実に大発見時代のころである。十六世紀の終わりにオランダ人は、東洋において灌かんぼ

木の葉からさわやかな飲料が造られることを報じた。ジオヴァーニ・バティスタ・ラムージオ（一五五九）、エル・アルメイダ（一五七六）、マフエノ（一五八八）、タレイラ（一六一〇）らの旅行者たちもまた茶のことを述べている（二）。一六一〇年に、オランダ東インド会社の船がヨーロッパに初めて茶を輸入した。一六三六年にはフランスに伝わり、一六三八年にはロシアにまで達した。英国は一六五〇年これを喜び迎えて、「かの卓絶せる、かつすべての医者 of 推奨するシナ飲料、シナ人はこれをチャと呼び、他国民はこれをテイまたはティーと呼ぶ。」と言っていた。

この世のすべてのよい物と同じく、茶の普及もまた反対にあった。ヘンリー・セイヴイル（一六七八）のような異端者は、茶を飲むことを不潔な習慣として口をきわめて非難した。ジョウナス・ハンウェイは言った。（茶の説・一七五六）茶を用いれば男は身のたけ低くなり、みめをそこない、女はその美を失うと。茶の価の高いために（一ポンド約十五シリング）初めは一般の人の消費を許さなかった。「歓待饗きょうおう 応用の王室御用品、王侯貴族の贈答用品」として用いられた。しかしこういう不利な立場にあるにもかかわらず、喫茶は、すばらしい勢いで広まって行った。十八世紀前半におけるロンドンのコーヒー店は、実際喫茶店となり、アデイソンやステイールのような文士のつどうところとなり、茶



を喫しながらかれらは退屈しのぎをしたものである。この飲料はまもなく生活の必需品——課税品——となった。これに関連して、現代の歴史において茶がいかに主要な役を務めているかを思い出す。アメリカ植民地は圧迫を甘んじて受けていたが、ついに、茶の重税に堪えかねて人間の忍耐力も尽きてしまった。アメリカの独立は、ボストン港に茶箱を投じたことに始まる。

茶の味には微妙な魅力があつて、人はこれに引きつけられないわけにはゆかない、またこれを理想化するようになる。西洋の茶人たちは、茶のかおりとかれらの思想の芳香を混ざるに鈍ではなかつた。茶には酒のような傲<sup>ごうまん</sup>慢なところがない。コーヒーのような自覚もなければ、またココアのような気取つた無邪気もない。一七一一年にすでにスベクテイター紙に次のように言っている。「それゆえに私は、この私の考えを、毎朝、茶とバターパンに一時間を取つておかれるような、すべての立派な御家庭へ特にお勧めしたいと思ひます。そして、どうぞこの新聞を、お茶のしたくの一部分として、時間を守つて出すようにお命じになることを、せつにお勧めいたします。」サミュエル・ジョンソンはみずから的人物を描いて次のように言っている。「因<sup>いんこう</sup>業な恥知らずのお茶飲みで、二十年間も食事を薄くするにただこの魔力ある植物の振り出しをもつてした。そして茶をもつて夕べ

を楽しみ、茶をもつて真夜中を慰め、茶をもつて晨あしたを迎えた。」

ほんとうの茶人チャールズ・ラムは、「ひそかに善を行なつて偶然にこれが現われることが何よりの愉快である。」というところに茶道の真髓を伝えている。というわけは、茶道は美を見いださんがために美を隠す術であり、現わすことをはばかるようなものをほめかす術である。この道はおのれに向かつて、落ち着いてしかし充分に笑うけだかい奥義である。従つてヒューマーそのものであり、悟りの微笑である。すべて真に茶を解する人はこの意味において茶人と言つてもよからう。たとえばサツカレー、それからシェイクスピアはもちろん、文芸廢はいたいき頽期の詩人もまた、（と言つても、いずれの時か廢頽期でなからう）物質主義に対する反抗のあまりいくらか茶道の思想を受け入れた。たぶん今日においてもこの「不完全」を真摯しんしに静観してこそ、東西相会して互いに慰めることができるであらう。

道教徒はいう、「無始」の始めにおいて「心」と「物」が決死の争闘をした。ついに大日輪ここうてい黄帝は閻やみと地の邪神祝融しゆくゆうに打ち勝つた。その巨人は死苦のあまり頭を天てん涯がいに打ちつけ、硬玉の青天を粉碎した。星はその場所を失い、月は夜の寂寞せきぼくたる天空をあてもなくさまよつた。失望のあまり黄帝は、遠く広く天の修理者を求めた。捜し求めたかい

はあつて東方の海から女媧じよかという女皇、角つをいただき竜尾りゆうびをそなえ、火の甲冑かっちゆうをまとつて燦然さんぜんたる姿で現われた。その神は不思議な大釜おおがまに五色の虹にじを焼き出し、シナの天を建て直した。しかしながら、また女媧は蒼天そうてんにある二個の小隙しょうげきを埋めることを忘れたと言われている。かくのごとくして愛の二元論が始まった。すなわち二個の霊は空間を流転してとどまることを知らず、ついに合して始めて完全な宇宙をなす。人はおの希望と平和の天空を新たに建て直さなければならぬ。

現代の人道の天空は、富と権力を得んと争う莫大ぼくだいな努力によって全く粉碎せられている。世は利己、俗悪やみの闇に迷っている。知識は心にやましいことをして得られ、仁は実利のために行なわれている。東西両洋は、立ち騒ぐ海に投げ入れられた二童りゆうのごとく、人生の宝玉を得ようとすれどそのかいもない。この大荒廢を繕うために再び女媧じよかを必要とする。われわれは大権化だいこんげの出現を待つ。まあ、茶でも一口すすろうではないか。明るい午後の日ば竹林にはえ、泉水はうれしげな音をたて、松籟しょうらいはわが茶釜ちやがまに聞こえている。はかないことを夢に見て、美しい取りとめのないことをあれやこれやと考えようではないか。

## 第二章 茶の諸流

茶は芸術品であるから、その最もけだかい味を出すには名人を要する。茶にもいろいろある、絵画に傑作と駄作と——概して後者——があると同様に。と言っても、立派な茶をたてるのにこれぞという秘法はない、テイシアン、雪村せつそんのごとき名画を作製するのに何も規則がないと同様に。茶はたてるごとに、それぞれ個性を備え、水と熱に対する特別の親和力を持ち、世々相伝の追憶を伴ない、それ独特の話しぶりがある。真の美は必ず常にここに存するのである。芸術と人生のこの単純な根本的法則を、社会が認めないために、われわれはなんとという損失をこうむっていることであろう。宋の詩人李仲光りちゆうこうは、世に最も悲しむべきことが三つあると嘆じた、すなわち誤れる教育のために立派な青年をそこなうもの、鑑賞の俗悪なために名画の価値を減ずるもの、手ぎわの悪いために立派なお茶を全く浪費するものこれである。

芸術と同じく、茶にもその時代と流派とがある。茶の進化は概略三大時期に分けられる、

煎茶、抹茶および掩茶すなわちこれである。われわれ現代人はその最後の流派に属している。これら茶のいろいろな味わい方は、その流行した当時の時代精神を表わしている。と言うのは、人生はわれらの内心の表現であり、知らず知らずの行動はわれわれの内心の絶えざる発露であるから。孔子いわく「人いづくんぞ さんや、人いづくんぞ さんや」と。たぶんわれわれは隠すべき偉大なものが非常に少ないからであろう、些事に自己を顕わすことが多すぎて困る。日々起こる小事件も、哲学、詩歌の高翔と同じく人種的理想の評論である。愛好する葡萄酒の違いでさえ、ヨーロッパのいろいろな時代や国民のそれぞれの特質を表わしているように、茶の理想もいろいろな情調の東洋文化の特徴を表わしている。煮る団茶、かき回す粉茶、淹す葉茶はそれぞれ、唐、宋、明の気分を明らかに示している。もし、芸術分類に濫用された名称を借りとすれば、これらをそれぞれ、古典的、ローマン的、および自然主義的な茶の諸流と言えるであろう。

南シナの産なる茶の木は、ごく早い時代からシナの植物学界および薬物学界に知られていた。古典には、※、※、※、檟、茗、というようにいろいろな名前を書いてあつて、疲労をいやし、精神をさわやかにし、意志を強くし、視力をととのえる効能があるために大いに重んぜられた。ただに内服薬として服用せられたのみならず、しばしばリユーマチの

痛みを軽減するために、煉薬れんやくとして外用薬にも用いられた。道教徒は、不死の靈薬の重要な成分たることを主張した。仏教徒は、彼らが長時間の黙想中に、睡魔予防剤として広くこれを服用した。

四五世紀のころには、揚子江流域住民の愛好飲料となった。このころに至って始めて、現代用いている「茶」という表意文字が造られたのである。これは明らかに、古い「※」の字の俗字であろう。南朝の詩人は「液体硬玉の泡沫ほうまつ」を熱烈に崇拜した跡が見えている。また帝王は、高官の者の勲功に対して上製の茶を贈与したものである。しかし、この時期における茶の飲み方はきわめて原始的なものであった。茶の葉を蒸して白うすに入れてつき、団子として、米、薑はしかみ、塩、橘皮きつび、香料、牛乳等、時には葱ねぎとともに煮るのであった。この習慣は現今チベット人および蒙古種族の間に行なわれていて、彼らはこれらの混合物で一種の妙なシロップを造るのである。ロシア人がレモンの切れを用いるのは——彼らはシナの隊商宿から茶を飲むことを覚えたのであるが——この古代の茶の飲み方が残っていることを示している。

茶をその粗野な状態から脱して理想の域に達せしめるには、実に唐朝の時代精神を要した。八世紀の中葉に出た陸羽りくくう（三）をもって茶道の鼻祖とする。かれは、仏、道、儒教が

互いに混濬こんこんせんとしている時代に生まれた。その時代の汎神論はんしんろんてき的象徴主義に促されて、人は特殊の物の中に万有の反映を見るようになった。詩人陸羽は、茶の湯に万有を支配しているものと同一の調和と秩序を認めた。彼はその有名な著作茶経（茶の聖典）において、茶道を組織立てたのである。爾來じらい彼は、シナの茶をひさぐ者の保護神としてあげられている。

茶経は三卷十章よりなる。彼は第一章において茶の源を論じ、第二章、製茶の器具を論じ、第三章、製茶法を論じている（四）。彼の説によれば、茶の葉の質の最良なものは必ず次のようなものである。

胡人こじんのかわくつ

のごとくなる者 蹙縮しゆくしゆく然ぜんたり（五）

牛ほうぎゆう

の臆むねなる者 廉れん※然ぜんたり

（六） 浮雲の山をいずる者 輪菌然りんくんとんたり（七）

輕けい颺えん

の水を払う者 涵澹かんぜん然ぜんたり（八）

また新治の地なる者 暴雨りゆうりよう流りゆう 潦りょうの経る所に遇あうがごとし（九）

第四章はもつばら茶器の二十四種を列挙してこれについての記述であつて、風炉ふうろ（一〇）に始まり、これらのすべての道具を入れる都ちやだんす 籃らんに終わっている。ここにもわれわれは陸羽の道教象徴主義に対する偏好を認める。これに連関して、シナの製陶術に及ぼした茶の影響を観察してみることがもまた興味あることである。シナ磁器は、周知のごとく、その

源は硬玉のえも言われぬ色合いを表わそうとの試みに起こり、その結果唐代には、南部の青磁と北部の白磁を生じた。陸羽は青色を茶碗ちやわんに理想的な色と考えた、青色は茶の緑色を増すが白色は茶を淡紅色にしてまずそうにするから。それは彼が団茶を用いたからであつた。その後宋そうの茶人らが粉茶を用いるに至つて、彼らは濃藍のうらんしよく色および黒褐色こくかつしよくの重い茶碗を好んだ。明人みんじんは淹茶だしちやを用い、軽い白磁を喜んだ。

第五章において陸羽は茶のたて方について述べている。彼は塩以外の混合物を取り除いている。彼はまた、これまで大いに論ぜられていた水を選択、煮沸の程度の問題についても詳述している。彼の説によると、その水、山水を用うるは上じやう、江水は中、井水は下である。煮沸に三段ある。その沸、魚目(一一)のごとく、すこし声あるを一沸となし、縁辺の涌泉蓮珠ゆうせんれんしゆ (一二)のごとくなるを二沸となし、騰波鼓浪とうはころう (一三)を三沸となしてゐる。団茶はこれをあぶつて嬰兒えいじの臂ひじのごとく柔らかにし、紙袋を用いてこれをたくわう。初沸にはすなわち、水量に合わせてこれをととのうるに塩味をもつてし、第二沸に茶を入れる。第三沸には少量の冷水をかまに注ぎ、茶を静めてその「華か (一四)」をやしな育う。それからこれを茶碗に注いで飲むのである。これまさに神酒！晴天爽朗せうらうなるに浮雲ふうりんぜん鱗然たるあるがごとし (一五)。その沫あわは緑銭の水涓すいに浮かべるがごとし (一六)。唐の詩人盧



同の歌つたのはこのような立派な茶のことである。

一 椀喉 吻潤い、二 椀孤悶を破る。三 椀枯腸をさぐる。惟う文字五千卷有り。四 椀輕汗を発す。平生不平の事ごとく毛孔に向かつて散ず。五 椀肌骨清し。六 椀仙靈に通ず。七 椀吃し得ざるに也ただ覚ゆ 両 腋 習々清風の生ずるを。蓬萊山はいづくにかある 玉川子この清風に乗じて帰りなんと欲す（一七）。

茶経の残りの章は、普通の喫茶法の俗悪なこと、有名な茶人の簡単な実録、有名な茶園、あらゆる変わった茶器、および茶道具のさし絵が書いてある。最後の章は不幸にも欠けている。

茶経が世に出て、当時かなりの評判になったに違いない。陸羽は代宗（七六三—七七九）の援くるところとなり、彼の名声はあがって多くの門弟が集まって来た。通人の中には、陸羽のたてた茶と、その弟子のたてた茶を飲み分けることができる者もいたということである。ある官人はこの名人のたてた茶の味がわからなかつたために、その名を不朽に伝えている。

宋代には抹茶が流行するようになって茶の第二の流派を生じた。茶の葉は小さな白で挽いて細粉とし、その調製品を湯に入れて割り竹製の精巧な小箒でまぜるのであった。

この新しい方法が起こったために、陸羽が茶の葉の選択法はもちろん、茶のたて方にも多少の変化を起こすに至って、塩は永久にすてられた。宋人の茶に対する熱狂はとどまるどころを知らなかった。食道楽の人は互いに競うて新しい変わった方法を発見しようとした、そしてその優劣を決するために定時の競技が行なわれた。徽宗皇帝（一一〇一—一一二四）はあまりに偉い芸術家であつて行ないよろしきになつた王とはいえないが、茶の珍種を得んためにその財宝を惜しげもなく費やした。王みずから茶の二十四種についての論を書いて、そのうち、「白茶」を最も珍しい良質のものであると書いて重んじている。

宋人の茶に対する理想は唐人とは異なつていた、ちやうどその人生観が違つていたように。宋人は、先祖が象徴をもつて表わそうとした事を写實的に表わそうと努めた。新儒教の心には、宇宙の法則はこの現象世界に映らなかつたが、この現象世界がすなわち宇宙の法則そのものであつた。永劫えいこうはこれただ瞬時——涅槃ねはんはつねに掌握のうち、不朽は永遠の変化に存すという道教の考えが彼らのあらゆる考え方にしみ込んでいた。興味あるところはその過程にあつて行為ではなかつた。真に肝要なるは完成することであつて完成ではなかつた。かくのごとくして人は直ちに天に直面するようになった。新しい意味は次第に生の術にはいつて来た。茶は風流な遊びではなくなつて、自性じしやうりやうげ了解の一つの方法とな

つて来た。王元之おうげんしは茶を称揚して、直言のごとく靈をあふらせ、その爽快そうかいな苦味は善言よげいの余馨よけいを思わせると言った。蘇東坡そとうばは茶の清淨無垢むくな力について、真に有徳の君子のごとく汚けがすことができないと書いている。仏教徒の間では、道教の教義を多く交じえた南方の禪宗が苦心たんせい丹精たんせいの茶の儀式を組み立てた。僧らは菩提達磨ぼだいだるまの像の前に集まって、ただ一個の碗わんから聖餐せいさんのようにすこぶる儀式張つて茶を飲むのであった。この禪の儀式こそはついに發達して十五世紀における日本の茶の湯となつた。

不幸にして十三世紀蒙古種族もうこの突如として起こるにあい、元朝げんちようの暴政によつてシナはついに劫掠こうりやく征服せられ、宋代そうだい文化の所産はことごとく破壊せらるるに至つた。十七世紀の中葉に国家再興を企ててシナ本国から起こつた明朝みんちようは内紛のために悩まされ、次いで十八世紀、シナはふたたび北狄ほくてき滿州人の支配するところとなつた。風俗習慣は變じて昔日の面影もなくなつた。粉茶は全く忘れられている。明の一訓くん誥こ学者がくしやは宋代典籍の一にあげてある茶筌ちやせんの形状を思い起こすに苦しんでいる。現今の茶は葉を碗わんに入れて湯に浸して飲むのである。西洋の諸国が古い喫茶法を知らない理由は、ヨーロッパ人は明朝の末期に茶を知つたばかりであるという事実によつて説明ができるのである。

後世のシナ人には、茶は美味な飲料ではあるが理想的なものではない。かの国の長い災

禍は人生の意義に対する彼の強い興味を奪ってしまった。彼は現代的になった、すなわち老いて夢よりさめた。彼は詩人や古人の永遠の若さと元気を構成する幻影に対する崇高な信念を失ってしまった。彼は折衷家となつて宇宙の因襲を静かに信じてこんなものだと悟っている。天をもてあそぶけれども、へりくだつて天を征服しまたはこれを崇拜することはしない。彼の葉茶は花のごとき芳香を放つてしばしば驚嘆すべきものがあるが、唐宋時代の茶の湯のロマンスは彼の茶碗には見ることができない。

日本はシナ文化の先蹤を追うて来たのであるから、この茶の三時期をことごとく知っている。早くも七二九年聖武天皇奈良の御殿において百僧に茶を賜うと書物に見えている。茶の葉はたぶん遣唐使によつて輸入せられ、当時流行のたて方でたてられたものであろう。八〇一年には僧最澄茶の種を携え帰つて叡山にこれを植えた。その後年を経るにしたがつて貴族僧侶の愛好飲料となつたのはいうまでもなく、茶園もたくさんできたとのことである。宋の茶は一一九一年、南方の禅を研究するために渡つていた栄西禅師の帰国とともにわが国に伝わつて来た。彼の持ち帰つた新種は首尾よく三か所に植え付けられ、その一か所京都に近い宇治は、今なお世にもまれなる名茶産地の名をとどめている。南宋の禅は驚くべき迅速をもつて伝播し、これとともに宋の茶の儀式および茶

の理想も広まって行つた。十五世紀のころには將軍足利義政の奨励するところとなり、茶の湯は全く確立して、独立した世俗のことになった。爾來茶道はわが国に全く動かすべからざるものとなつている。後世のシナの煎茶は、十七世紀中葉以後わが国に知られたばかりであるから、比較的最近に使用し始めたものである。日常の使用には煎茶が粉茶に取つて代わるに至つた、といつても粉茶は今なお茶の中の茶としてその地歩を占めてはいるが。

日本の茶の湯においてこそ始めて茶の理想の極点を見ることができるのである。一二年蒙古襲来に当たつてわが国は首尾よくこれを撃退したために、シナ本国においては蛮族侵入のため不幸に断たれた宋の文化運動をわれわれは続行することができた。茶はわれわれにあつては飲む形式の理想化より以上のものとなつた、今や茶は生の術に関する宗教である。茶は純粹と都雅を崇拜すること、すなわち主客協力して、このおりにこの浮世の姿から無上の幸福を作り出す神聖な儀式を行なう口実となつた。茶室は寂寞たる人世の荒野における沃地であつた。疲れた旅人はここに会して芸術鑑賞という共同の泉から渴をいやすことができた。茶の湯は、茶、花卉、絵画等を主題に仕組まれた即興劇であつた。茶室の調子を破る一点の色もなく、物のリズムをそこなうそよとの音もなく、調和を乱す

一指の動きもなく、四囲の統一を破る一言も発せず、すべての行動を単純に自然に行なう——こういうのがすなわち茶の湯の目的であった。そしていかにも不思議なことには、それがしばしば成功したのであった。そのすべての背後には微妙な哲理が潜んでいた。茶道は道教の仮りの姿であった。

### 第三章 道教と禅道

茶と禅との関係は世間周知のことである。茶の湯は禅の儀式の発達したものであるということはすでに述べたところであるが、道教の始祖老子の名もまた茶の沿革と密接な関係がある。風俗習慣の起源に関するシナの教科書に、客に茶を供するの礼は老子の高弟関尹（一八）に始まり、函谷関で「老哲人」にまず一碗の金色の仙薬をささげたと書いてある。道教の徒がつとにこの飲料を用いたことを確証するようないろいろな話の真偽をゆつくりと詮議するのにも価値あることではあるが、それはさておきここでいう道教と禅道とに対する興味は、主としていわゆる茶道として実際に現われている、人生と芸術に関するそれらの思想に存するのである。

遺憾ながら、道教徒と禅の教義とに関して、外国語で充分に表わされているものは今のところ少しもないように思われる。立派な試みはいくつかあったが（一九）。

翻訳は常に叛逆であつて、明朝の一作家の言のごとく、よくいったところだ

だ錦にしきの裏を見るに過ぎぬ。縦横の糸は皆あるが色彩、意匠の精妙は見られない。が、要するに容易に説明のできるころになんの大教理が存しよう。古いにしえの聖人は決してその教えに系統をたてなかつた。彼らは逆説をもつてこれを述べた、というのは半面の真理を伝えんことを恐れたからである。彼らの始め語るや愚者のごとく終わりに聞く者をして賢ならしめた。老子みずからその奇警な言でいうに、「下士は道を聞きて大いにこれを笑う。笑わざればもつて道となすに足らず。」と。「道」は文字どおりの意味は「径路」である。それは the Way (行路) 、 the Absolute (絶対) 、 the Law (法則) 、 Nature (自然) 、 Supreme Reason (至理) 、 the Mode (方式) 、 等いろいろに訳されている。こういう訳も誤りではない。というのは道教徒のこの言葉の用法は、問題にしている話題いかなによつて異なっているから。老子みずからこれについて次のように言っている。

物有り混成し、天地に先だつて生ず。寂せきたり寥りようたり。独立して改めず。周行して殆あやうか  
らず。もつて天下の母となすべし。吾われその名を知らず。これを字あざなして道という。強しいてこ  
れが名をなして大という。大を逝せいといひ、逝を遠といひ、遠を反という。

「道」は「径路」というよりもむしろ通路にある。宇宙変遷の精神、すなわち新しい形を生み出そうとして絶えずめぐり来る永遠の成長である。「道」は道教徒の愛する象徴りゆう竜の



ごとくにすでに反り、雲のごとく巻ききたつては解け去る。「道」は大推移とも言うことができよう。主観的に言えば宇宙の気であつて、その絶対は相対的なものである。

まず第一に記憶すべきは、道教はその正統の継承者禅道と同じく、南方シナ精神の個人的傾向を表わして、儒教という姿で現われている北方シナの社会的思想とは対比的に相違があるということである。中国はその広漠たることヨーロッパに比すべく、これを貫流する二大水系によつて分かれた固有の特質を備えている。揚子江と黄河はそれぞれ地中海とバルト海である。幾世紀の統一を経た今日でも南方シナはその思想、信仰が北方の同胞と異なること、ラテン民族がチュートン民族とこれを異にすると同様である。古代交通が今日よりもなおいっそう困難であつた時代、特に封建時代においては思想上のこの差異はことに著しいものであつた。一方の美術、詩歌の表わす気分は他方のものと全く異なつたものである。老子とその徒および揚子江畔自然詩人の先駆者屈原の思想は、同時代北方作家の無趣味な道德思想とは全く相容れない一種の理想主義である。老子は西暦紀元前四世紀の人である。

道教思想の萌芽は老 出現の遠い以前に見られる。シナ古代の記録、特に易 経は老子の思想の先駆をなしている。しかし紀元前十二世紀、周 朝の確立とともに古代シ

ナ文化は隆盛その極に達し、法律慣習が大いに重んぜられたために、個人的思想の発達は長い間阻止せられていた。周崩解して無数の独立国起るにおよび、始めて自由思想がはなやかに咲き誇ることができた。老子そうじ・莊子そうじは共に南方人で新派の大主唱者であった。一方孔子はその多くの門弟とともに古来の伝統を保守せんと志したものである。道教を解せんとするには多少儒教の心得がいる。この逆も同じである。

道教という絶対は相対であることは、すでに述べたところであるが、倫理学においては道教徒は社会の法律道德を罵倒ばとうした。というのは彼らにとつては正邪善悪は単なる相対的の言葉であつたから。定義は常に制限である。「一定」「不変」は単に成長停止を表わす言葉に過ぎない。屈くつげん・原げんいわく「聖人はよく世とともに推移す。」われらの道德的規範は社会の過去の必要から生まれたものであるが、社会は依然として旧態にとどまるべきものであろうか。社会の慣習を守るためには、その国に対して個人を絶えず犠牲にすることを免れぬ。教育はその大迷想を続けんがために一種の無知を奨励する。人は真に徳行ある人たることを教えられずして行儀正しくせよと教えられる。われらは恐ろしく自己意識が強いから不道德を行なう。おのれ自身が悪いと知っているから人を決して許さない。他人に眞実を語ることを恐れているから良心をはぐくみ、おのれに眞実を語るを恐れてうぬぼれ

を避難所にする。世の中そのものがばかばかしいのにだれがよくまじめでいられよう！

といい、物々交換の精神は至るところに現われている。義だ！ 貞節だ！ などというが、真善の小売りをして悦えつに入っている販売人を見よ。人はいわゆる宗教さえもあがなうことができる。それは実のところたかの知れた倫理学を花や音楽で清めたもの。教会からその付属物を取り去ってみよ、あとに何が残るか。しかしトラスト（二〇）は不思議なほど繁盛する、値段が途方もなく安いから——天国へ行く切符代の御祈ごきとう祷も、立派な公民の免許状も。めいめい速く能を隠すがよい。もしほんとうに重宝だと世間へ知れたならば、すぐに競売に出されて最高入札者の手に落とされよう。男も女も何ゆえにかほど自己を広告したいのか。奴隷制度の昔に起源する一種の本能に過ぎないのではないか。

道教思想の雄ゆうこん渾こんなどころは、その後続いて起こった種々の運動を支配したその力にも

見られるが、それに劣らず、同時代の思想を切り抜けたその力に存している。秦しんちよう朝、

といえばシナという名もこれに由来しているかの統一時代であるが、その朝を通じて道教は一活動力であった。もし時の余裕があれば、道教がその時代の思想家、数学家、法律家、兵法家、神秘家、錬金術家および後の江畔自然詩人らに及ぼした影響を注意して見るのも興味あることであろう。また白馬は白く、あるいは堅きがゆえにその実在いかんを疑った

實在論者（二一）や、禪門のごとく清浄、絶対について談論した六朝りくちようの清談家も無視することはできぬ。なかならず、道教がシナ国民性の形成に寄与したところ、「温なること玉のごとし」という慎み、上品の力を与えた点に対して敬意を表すべきである。シナ歴史は、熱心な道教信者が王侯も隠者も等しく彼らの信条の教えに従って、いろいろな興味深い結果をもたらした実例に満ち満ちている。その物語には必ずその持ち前の楽しみもあり教訓もあろう。逸話、寓言ぐうげん、警句も豊かにあろう。生きていたことがないから死んだこともないあの愉快な皇帝と、求めても言葉をかわずくらの間がらになりたいたいものである。列子とともに風に御ぎよして寂靜じやくじよう無為むゐを味わうこともできよう、われらみずから風であり、天にも属せず地にも属せず、その中間に住した河上の老人とともに中空にいるものであるから。現今のシナに見る、かの奇怪な、名ばかりの道教においてさえも、他の何道にも見るこのできないたくさんの比喩ひゆを楽しむことができるのである。

しかしながら、道教がアジア人の生活に対してなしたおもな貢献は美学の領域であった。シナの歴史家は道教のことを常に「処世術」と呼んでいる、というのは道教は現在を——われら自身を取り扱うものであるから。われらこそ神と自然の相会うところ、きのうとあすの分かれるところである。「現在」は移動する「無窮」である。「相対性」の合法的な活

動範囲である。「相対性」は「安排」を求める。「安排」は「術」である。人生の術はわれらの環境に対して絶えず安排するにある。道教は浮世をこんなものだとあきらめて、儒教徒や仏教徒とは異なつて、この憂うれき世の中にも美を見いだそうと努めてゐる。宋代そうだいのたとえ話に「三人の酔を味わう者」というのがあるが、三教義の傾向を実に立派に説明している。昔、釈迦牟尼しやくかむに、孔子、老子が人生の象徴酔瓶すかめの前に立つて、おのおの指をつけてそれを味わつた。實際的な孔子はそれが酸すいと知り、仏陀ぶつだはそれを苦にがいと呼び、老子はそれを甘いと言つた。

道教徒は主張した。もしだれもかれも皆が統一を保つようにするならば人生の喜劇はなおいつそうおもしろくすることができる。物のつりあいを保つて、おのれの地歩を失わず他人に譲ることが浮世芝居の秘訣ひけつである。われわれはおのれの役を立派に勤めるためには、その芝居全体を知っていなければならぬ。個人を考えるために全体を考えることを忘れてはならない。この事を老子は「虚」という得意の隱喻いんゆで説明している。物の真に肝要なところはただ虚にのみ存すると彼は主張した。たとえば室の本質は、屋根と壁に囲まれた空虚なところに見いだすことができるのであつて、屋根や壁そのものにはない。水さしの役に立つところは水を注ぎ込むことのできる空所にあつて、その形状や製品のい

かんには存しない。虚はすべてのものを含有するから万能である。虚においてのみ運動が可能となる。おのれを虚にして他を自由に入らすことのできる人は、すべての立場を自由に行動することができるようになるであろう。全体は常に部分を支配することができるのである。

道教徒のこういう考え方は、剣道相撲すもうの理論に至るまで、動作のあらゆる理論に非常な影響を及ぼした。日本の自衛術である柔術はその名を道德経の中の一句に借りている。柔術では無抵抗すなわち虚によって敵の力を出し尽くそうと努め、一方おのれの力は最後の奮闘に勝利を得るために保存しておく。芸術においても同一原理の重要なことが暗示の価値によってわかる。何物かを表わさずにおくところに、見る者はその考えを完成する機会を与えられる。かようにして大傑作は人の心を強くひきつけてついには人が実際にその作品の一部分となるように思われる。虚は美的感情の極致までも入って満たせとばかりに人を待っている。

生の術をきわめた人は、道教徒の言うところの「土」であった。土は生まれると夢の国に入る、ただ死に当たって現実にめぐめようとするように。おのが身を世に知れず隠さんために、みずからの聡明そうめいの光を和らげ、「予よとして冬、川を渉わたるがごとく、猶ゆうとして四

隣をおそるるがごとく、儼げんとしてそれ客のごとく、渙かんとして冰のまきに積とけんとするがごとく、敦とんとしてそれ樸ぼくのごとく、曠こうとしてそれ谷のごとく、渾こんとしてそれ濁るがごとし（二二）。「土にとつて人生の三宝は、慈、儉、および「あえて天下の先とならず（二三）」ということであった。

さて禅に注意を向けてみると、それは道教の教えを強調していることがわかるであろう。禅は梵語ぼんごの禅那ぜんな（Dhyana）から出た名であつてその意味は静慮じょうりよである。精進しやうじん静慮することによつて、自性じしやうりやうげ了解ろつぱらみつの極致に達することができると禅は主張する。静慮は悟道に入ることのできる六波羅密の一つであつて、釈迦牟尼しやくかむにはその後年の教えにおいて、特にこの方法を力説し、六則をその高弟迦葉かしように伝えたと禅宗徒は確言している。かれらの言い伝えによれば、禅の始祖迦葉はその奥義を阿難陀あなんだに伝え、阿難陀から順次に祖師相伝ぼだいだるまえてついに第二十八祖菩提達磨に至つた。菩提達磨は六世紀の前半に北シナに渡つてシナ禅宗の第一祖となつた。これらの祖師やその教理の歴史については不確実なところが多い。禅を哲学的に見れば昔の禅学は一方において那伽闍刺樹那ながあらしじゆな（二四）のインド否定論に似ており、また他方においては商羯羅阿闍梨しやんからあじやりの組み立てた無明観むみやう（二六）に似たところがあるように思われる。今日われらの知っているとおり禅の教理は南方禅（南方シナに

勢力があつたことからそういわれる)の開山シナの第六祖慧能(六三七—七一三)が始めて説いたに違いない。慧能の後、ほどなく馬祖大師(七八八滅)これを継いで禅を中国人の生活における一活動勢力に作りあげた。馬祖の弟子百丈(七一九—八一四)は禅宗叢林を開創し、禅林清規を制定した。馬祖の時代以後の禅宗の問答を見ると、揚子江岸精神の影響をこうむつて、昔のインド理想主義とはきわ立って違ったシナ固有の考え方を増していることがわかる。いかほど宗派的精神の誇りが強くて、そうではないといつたところで、南方禅が老子や清談家の教えに似ていることを感じないわけにはいかなない。道德経の中にすでに精神集中の重要なことや氣息を適当に調節することを述べている——これは禅定に入るに必要欠くべからざる要件である。道德経の良注釈の或るものは禅学者によつて書かれたものである。

禅道は道教と同じく相对を崇拜するものである。ある禅師は禅を定義して南天に北極星を識るの術といつてゐる。真理は反対なものを会得することによつてのみ達せられる。さらに禅道は道教と同じく個性主義を強く唱道した。われらみずからの精神の働きに關係しないものはいっさい実在ではない。六祖慧能かつて二僧が風に翻る塔上の幡を見て対論するのを見た。「一はいわく幡動く。一はいわく風動く。」しかし、慧能は彼らに説明



して言った、これ風の動くにあらざまた幡ばんの動くにもあらざただ彼らみずからの心中のあ  
る物の動くなりと。百丈が一人の弟子と森の中を歩いてると一匹の兎うさぎが彼らの近寄つた  
のを知つて疾走し去つた。「なぜ兎はおまえから逃げ去つたのか。」と百丈が尋ねると、  
「私を恐れてでしょう。」と答えた。祖師は言った、「そうではない、おまえに残忍性が  
あるからだ。」と。この対話は道教の徒莊子の話を思い起させる。ある日莊子友と濠こうりよ  
梁りやうのほとりに遊んだ。莊子いわく「魚いしいで遊びて従しやう容ようたり。これ魚の楽しむ  
なり。」と。その友彼に答えていわく「子しは魚にあらざ。いづくんぞ魚の楽しみを知らん  
。」と。「子は我れにあらざ、いづくんぞわが魚の楽しみを知らざるを知らん。」と莊子  
は答えた。

禅は正統の仏道の教えとしばしば相反した、ちやうど道教が儒教と相反したように。禅  
門の徒の先験的洞察どうさつに対しては言語はただ思想の妨害となるものであった。仏典のあら  
ん限りの力をもつてしてもただ個人的思索の注釈に過ぎないのである。禅門の徒は事物の  
内面的精神と直接交通しようとし、その外面的の付属物はただ真理に到達する阻害と見  
なした。この絶対を愛する精神こそは禅門の徒をして古典仏教派の精巧な彩色画よりも墨  
絵の略画を選ばしめるに至つたのである。禅学徒の中には、偶像や象徴によらないでおの

れの中に仏陀ぶつだを認めようと努めた結果、偶像破壊主義者になったものさえある。丹霞和尚たんかおしょうは大寒の日に木仏を取ってこれを焚たいたという話がある。かたわらにいた人は非常に恐れて言った、「なんとまあもつたいたい！」と。和尚は落ち着き払って答えた、「わたしは仏様を焼いて、お前さんたちのありがたがっているお舍利しやりを取るのだ。」「木仏の頭からお舍利が出てたまるものですか。」とつつけんどんな受け答えに、丹霞和尚がこたえて言った、「もし、お舍利の出ない仏様なら、何ももつたいたいことはないではないか。」そう言つて振り向いてたき火にからだをあたためた。

禅の東洋思想に対する特殊な寄与は、この現世の事をも後生ごしょうのことと同じように重く認めたことである。禅の主張によれば、事物の大相対性から見れば大と小との区別はなく、一原子の中にも大宇宙と等しい可能性がある。極致を求めんとする者はおのれみずからの生活の中に靈光の反映を発見しなければならぬ。禅林の組織はこういう見地から非常に意味深いものであった。祖師を除いて禅僧はことごとく禅林の世話に関する何か特別の仕事を課せられた。そして妙なことには新参者には比較的軽い務めを与えられたが、非常に立派な修行を積んだ僧には比較的うるさい下賤げせんな仕事げせんが課せられた。こういう勤めが禅修行の一部をなしたものであつて、いかなる些細ささいな行動も絶対完全に行なわなければならない

のであった。こういうふうにして、庭の草をむしりながらも、蕪菁かぶらを切りながらも、またはお茶をくみながらも、いくつもいくつも重要な論議が次から次へと行なわれた。茶道いつさいの理想は、人生の些事さじの中にでも偉大を考えると、この禅の考えから出たものである。道教は審美的理想の基礎を与え、禅はこれを実際的なものとした。

## 第四章 茶室

石造や煉瓦造り建築の伝統によつて育てられた欧州建築家の目には、木材や竹を用いるわが日本式建築法は建築としての部類に入れる価値はほとんどないように思われる。ある相当立派な西洋建築の研究家がわが国の大社寺の実に完備していることを認め、これを称揚したのは全くほんの最近のことである。わが国で一流の建築についてこういう事情であるから、西洋とは全く趣を異にする茶室の微妙な美しき、その建築の原理および装飾が門外漢に充分にわかろうとはまず予期できないことである。

茶室（数寄屋）は単なる小家で、それ以外のものをてらうものではない、いわゆる茅屋ぼうおに過ぎない。数寄屋の原義は「好き家」である。後になつていろいろな宗匠が茶室に對するそれぞれの考えに従つていろいろな漢字を置き換えた、そして数寄屋という語は「空き家す」または「数奇家」の意味にもなる。それは詩趣を宿すための仮りの住み家であるからには「好き家」である。さしあたって、ある美的必要を満たすためにおく物のほか

は、いつさいの装飾を欠くからには「空すき家」である。それは「不完全崇拜」にさきげられ、故意に何かを仕上げずにおいて、想像の働きにこれを完成させるからには「数奇家」である。茶道の理想は十六世紀以来わが建築術に非常な影響を及ぼしたので、今日、日本の普通の家屋の内部はその装飾の配合が極端に簡素なため、外国人にはほとんど没趣味なものに見える。

始めて独立した茶室を建てたのは千宗易せんこのそうえき、すなわち後に利休りきゅうという名で普通に知られている大宗匠で、彼は十六世紀太閤秀吉たいたこうひでよしの愛顧をこうむり、茶の湯の儀式を定めてこれを完成の域に達せしめた。茶室の広さはその以前に十五世紀の有名な宗匠紹鷗じょうおうによって定められていた。初期の茶室はただ普通の客間の一部分を茶の会のために屏風びょうぶで仕切ったものであった。その仕切った部分は「かこい」と呼ばれた。その名は、家の中に作られていて独立した建物ではない茶室へ今もなお用いられている。数寄屋は、「グレイスの神よりは多く、ミューズの神よりは少ない。」という句を思い出させるような五人しかはいれないしくみの茶室本部と、茶器を持ち込む前に洗ってそろえておく控えの間みずや（水屋）と、客が茶室へはいれと呼ばれるまで待っている玄関まちあい（待合）と、待合と茶室を連絡している庭の小道ろじ（露地）とから成っている。茶室は見たところなんの印象も与え

ない。それは日本のいちばん狭い家よりも狭い。それにその建築に用いられている材料は、清貧を思わせるようにできている。しかしこれはすべて深遠な芸術的思慮の結果であつて、細部に至るまで、立派な宮殿寺院を建てるに費やす以上の周到な注意をもつて細工が施されていくということを忘れてはならない。よい茶室は普通の邸宅以上に費用がかかる、というのはその細工はもちろんその材料の選択に多大の注意と綿密を要するから。実際茶人に用いられる大工は、職人の中でも特殊な、非常に立派な部類を成している。彼らの仕事は漆器家具匠の仕事にも劣らぬ精巧なものであるから。

茶室はただに西洋のいずれの建築物とも異なるのみならず、日本そのものの古代建築とも著しい対照をなしている。わが国古代の立派な建築物は宗教に關係あるものもないものも、その大きさだけから言つても侮りがたいものであつた。数世紀の間不幸な火災を免れて来たわずかの建築物は、今なおその裝飾の壮大華麗によつて、人に畏敬いけいの念をおこさせる力がある。直径二尺から三尺、高さ三十尺から四十尺の巨柱は、複雑な腕木うでぎの網状細工によつて、斜めの瓦屋根かわらやねの重みにうなつてゐる巨大な梁はりをささえていた。建築の材料や方法は、火に対しては弱いけれども地震には強いということがわかつた。そしてわが国の氣候によく適していた。法隆寺ほつりゆうじの金堂こんどうや薬師寺やくしじの塔は木造建築の耐久性を示す注目す

べき実例である。これらの建物は十二世紀の間事実上そのまま保全せられていた。古い宮殿や寺の内部は惜しげもなく装飾を施されていた。十世紀にできた宇治の鳳凰堂には今もなお昔の壁画彫刻の遺物はもとより、丹精たんせいをこらした天蓋てんがい、金を蒔まき鏡や真珠をちりばめた廟蓋びやうがいを見ることができ、後になって、日光や京都二条の城においては、アラビア式またはムーア式華麗をつくした力作にも等しいような色彩の美や精巧をきわめたたくさんの装飾のために、建築構造の美が犠牲にせられているのを見る。

茶室の簡素清浄は禅院の競いからおこったものである。禅院は他の宗派のものとは異なつてただ僧の住所として作られている。その会堂は礼拝巡礼の場所ではなくて、禅修行者が会合して討論し黙想する道場である。その室は、中央の壁の凹所おうしよ、仏壇の後ろに禅宗の開祖菩提達磨ぼだいだるまの像か、または祖師迦葉かしようと阿難陀あなんだをしたがえた釈迦牟尼しやくかむにの像があるのを除いてはなんの飾りもない。仏壇には、これら聖者の禅に対する貢献を記念して香華かうげがささげてある。茶の湯の基をなしたものはほかではない、菩提達磨の像の前で同じ碗わんから次々に茶を喫むのという禅僧たちの始めた儀式であつたといふことはすでに述べたところである。が、さらにここに付言してよからうと思われは、禅院の仏壇は、床の間——絵や花を置いて客を教化する日本間の上座——の原型であつたといふことである。

わが国の偉い茶人は皆禪を修めた人であった。そして禪の精神を現実生活の中へ入れようと企てた。こういうわけで茶室は茶の湯の他の設備と同様に禪の教義を多く反映している。正統の茶室の広さは四畳半で維摩の經ゆいま きようもん文の一節によつて定められている。その興味ある著作において、馥柯羅摩訶秩多びからまかちつた（二七）は文珠師利菩薩もんじゆしりぼさつと八万四千の仏陀ぶつだの弟子でしをこの狭い室に迎えている。これすなわち真まことに覺さとつた者には一切いっさい皆かいくう空くうという理論に基づくとえ話である。さらに待合から茶室に通ずる露地は黙想の第一階段、すなわち自己照明に達する通路を意味していた。露地は外界との關係を断つて、茶室そのものにおいて美的趣味を充分に味わう助けとなるように、新しい感情を起こすためのものであった。この庭徑を踏んだことのある人は、常緑樹の薄明に、下には松葉の散りしくところを、調和ある不ぞろいな庭石の上を渡つて、苔こけむした石燈籠いしどうろうのかたわらを過ぎる時、わが心のいかに高められたかを必ず思い出すであろう。たとえ都市のまん中においてもなお、あたかも文明の雑踏ちりや塵ちりを離れた森の中にいるような感がする。こういう静寂純潔の効果を生ぜしめた茶人の巧みは実に偉いものであった。露地を通り過ぎる時に起こすべき感情の性質は茶人によつていろいろ違つていた。利休のような人たちは全くの静寂を目的とし、露地を作るの奥意は次の古歌の中にこもつていと主張した（二八）。



見渡せば花ももみじもなかりけり

浦のとまやの秋の夕暮れ（二九）

その他小堀遠州こぼりえんしゅうのような人々はまた別の効果を求めた。遠州は庭徑の着想は次の句の中にあると言った。

夕月夜海すこしある木の間かな（三〇）

彼の意味を推測するのは難くない。彼は、影のような過去の夢の中になおさまよいながらも、やわらかい靈光の無我の境地に浸って、渺茫びようぼうたるかなたに横たわる自由をあこがれる新たに目ざめた心境をおこそうと思つた。

こういう心持ちで客は黙々としてその聖堂に近づいて行く。そしてもし武士ならばその劍を軒下の刀架とうかにかけておく、茶室は至極平和の家であるから。それから客は低くかがんで、高さ三尺ぐらゐの狭い入り口「にじり口」からにじってはいる。この動作は、身貴たつときも卑しきも同様にすべての客に負わされる義務であつて、人に謙讓を教え込むためのものであつた。席次は待合で休んでいる間に定まっているので、客は一人ずつ静かにはいつてその席につき、まず床の間の絵または生花に敬意を表する。主人は、客が皆着席して部屋へやが静まりきり、茶釜ちやがまにたぎる湯の音を除いては、何一つ静けさを破るものもないように

なつて、始めてはいつてくる。茶釜は美しい音をたてて鳴る。特殊のメロデーを出すように茶釜の底に鉄片が並べてあるから。これを聞けば、雲に包まれた滝の響きか岩に砕くる遠海の音か竹林を払う雨風か、それともどこか遠き丘の上の松しゅうらい 籟かとも思われる。

日中でも室内の光線は和らげられている。傾斜した屋根のある低いひさしは日光を少しか入れないから。天井から床に至るまですべての物が落ち着いた色合いである。客みずからも注意して目立たぬ着物を選んでゐる。古めかしい和らかさがすべての物に行き渡っている。ただ清浄無垢むくな白い新しい茶ちや筥せんと麻ふきんが著しい対比をなしているのを除いては、新しく得られたらしい物はすべて厳禁せられている。茶室や茶道具がいかに色あせて見えてもすべての物が全く清潔である。部屋へやの最も暗いすみにさえ塵ちり一本も見られない。もしあるようならばその主人は茶人とはいわれないのである。茶人に第一必要な条件の一は掃き、ふき清め、洗うことに関する知識である、払い清めるには術を要するから。金属細工はオランダの主婦のように無遠慮にやつきとなつてはたいはならない。花瓶かびんからしたたる水はぬぐい去るを要しない、それは露を連想させ、涼味を覚えさせるから。

これに関連して、茶人たちのいだいていた清潔という考えをよく説明している利休についての話がある。利休はその子紹安じょうあんが露地を掃除そうじし水をまくのを見ていた。紹安が掃

除を終えた時利休は「まだ充分でない。」と言つてもう一度しなおすように命じた。いやながら一時間もかかつてからむすこは父に向かつて言つた、「おとうさん、もう何もすることはありません。庭石は三度洗い石燈籠いしどうろうや庭木にはよく水をまき蘚苔こけは生き生きした緑色に輝いています。地面には小枝一本も木の葉一枚ありません。」「ばか者、露地の掃除はそんなふうにするものではない。」と言つてその茶人はしかった。こう言つて利休は庭におり立ち一樹を揺すつて、庭一面に秋の錦にしきを片々と黄金、紅の木の葉を散りしかせた。利休の求めたものは清潔のみではなくて美と自然とであつた。

「好き家」という名はある個人の芸術的要求にかなうように作られた建物という意味を含んでいる。茶室は茶人のために作ったものであつて茶人は茶室のためのものではない。それは子孫のために作ったのではないから暫定的である。人は各自独立の家を持つべきであるという考えは日本民族古来の習慣に基づいたもので、神道の迷信的習慣の定めによれば、いずれの家もその家長が死ぬと引き払うことになつている。この習慣はたぶんあるわけではない衛生上の理由もあつてのことかもしれない。また別に昔の習慣として新婚の夫婦には新築の家を与えるということもあつた。こういう習慣のために古代の皇居は非常にしばしば次から次へとうつされた。伊勢いせの大たい廟びやうを二十年ごとに再築するのは古いにしえの儀式的の今日

なお行なわれている一例である。こういう習慣を守るのは組み立て取りこわしの容易なわが国の木造建築のようなある建築様式においてのみ可能であった。煉瓦<sup>れんが</sup>石材を用いるやや永続的な様式は移動できないようにしたのであろう、奈良朝以後シナの鞏固<sup>きょうこ</sup>な重々しい木造建築を採用するに及んで実際移動不可能になったように。

しかしながら十五世紀禅の個性主義が勢力を得るにつれて、その古い考えは茶室に連関して考えられ、これにある深い意味がしみこんで来た。禅は仏教の有為転変<sup>ういてんべん</sup>の説と精神が物質を支配すべきであるというその要求によつて家をば身を入れるただ仮りの宿と認めた。その身とてただ荒野にたてた仮りの小屋、あたりにはえた草を結んだか弱い雨露のぎ——この草の結びが解ける時はまたもとの野原に立ちかえる。茶室において草ぶきの屋根、細い柱の弱々しさ、竹のささえの軽やかさ<sup>かろ</sup>、さてはありふれた材料を用いて一見いかにも無頓着<sup>むとんじゃく</sup>らしいところにも世の無常が感ぜられる。常住は、ただこの単純な四囲の事物の中に宿されていて風流の微光で物を美化する精神に存している。

茶室はある個人的趣味に適するように建てらるべきだということとは、芸術における最も重要な原理を実行することである。芸術が充分に味わわれるためにはその同時代の生活に合っていないければならぬ。それは後世の要求を無視せよというのではなくて、現在をなお

いつそう楽しむことを努むべきだというのである。また過去の創作物を無視せよというのではなくて、それをわれらの自覚の中に同化せよというのである。伝統や型式に屈従することは、建築に個性の表われるのを妨げるものである。現在日本に見るような洋式建築の無分別な模倣を見てはただ涙を注ぐほかはない。われわれは不思議に思う、最も進歩的な西洋諸国の間に何ゆえに建築がかくも斬新ざんしんを欠いているのか、かくも古くさい様式の反復に満ちているのかと。たぶん今芸術の民本主義の時代を経過しつつ、一方にある君主らしい支配者が出現して新たな王朝をおこすのを待っているのであろう。願わくは古人を懐懐慕いぼすることはいつそうせつに、かれらに模倣することはますます少なからんことを！ ギリシャ国民の偉大であったのは決して古物に求めなかつたからであると伝えられている。「空すき家」という言葉は道教の万物包ほうかん涵かんの説を伝えるほかに、裝飾精神の変化を絶えず必要とする考えを含んでいる。茶室はただ暫時美的感情を満足さすためにおかれる物を除いては、全く空虚である。何か特殊な美術品を臨時に持ち込む、そしてその他の物はすべて主調の美しさを増すように選択配合せられるのである。人はいろいろな音楽を同時に聞くことはできぬ、美しいものの真の理解はただある中心点に注意を集中することによってのみできるのであるから。かくのごとくわが茶室の裝飾法は、現今西洋に行なわれている

装飾法、すなわち屋内がしばしば博物館に変わっているような装飾法とは趣を異にしていることがわかるだろう。装飾の単純、装飾法のしばしば変化するのになれている日本人の目には、絵画、彫刻、骨董品こっとうひんのおびただしい陳列で永久的に満たされている西洋の屋内は、単に俗な富を誇示しているに過ぎない感を与える。一個の傑作でも絶えずながめて楽しむには多大の鑑賞力を要する。してみれば欧米の家庭にしばしば見るような色彩形状の混沌こんとんたる間に毎日毎日生きている人たちの風雅な心はさぞかし際限もなく深いものであろう。

「数寄屋」はわが装飾法の他の方面を連想させる。日本の美術品が均斉を欠いていることは西洋批評家のしばしば述べたところである。これもまた禅を通じて道教の理想の現われた結果である。儒教の根深い両元主義も、北方仏教の三尊崇拜も、決して均斉の表現に反対したものではなかった。実際、もしシナ古代の青銅器具または唐代および奈良時代ならの宗教的美術品を研究してみれば均斉を得るために不断の努力をしたことが認められるであろう。わが国の古典的屋内装飾はその配合が全く均斉を保っていた。しかしながら道教や禅の「完全」という概念は別のものであった。彼らの哲学の動的な性質は完全そのものよりも、完全を求むる手続きに重きをおいた。真の美はただ「不完全」を心の中に完成する人

によつてのみ見いだされる。人生と芸術の力強いところはその発達の可能性に存した。茶室においては、自己に関連して心の中に全効果を完成することが客各自に任されている。禅の考え方が世間一般の思考形式となつて以来、極東の美術は均斉ということとは完成を表わすのみならず重複を表わすものとしてことさらに避けていた。意匠の均等は想像の清新を全く破壊するものと考えられていた。このゆえに人物よりも山水花鳥を画題として好んで用いるようになった。人物は見る人みずからの姿として現われているのであるから。實際われわれは往々あまりに自己をあらわし過ぎて困る、そしてわれわれは虚栄心があるにもかかわらず自愛さえも単調になりがちである。茶室においては重複の恐れが絶えずある。室の装飾に用いる種々な物は色彩意匠の重複しないように選ばなければならぬ。生花があれば草花の絵は許されぬ。丸い釜かまを用いれば水さしは角張つていなければならぬ。黒釉くろうわの茶わんは黒塗りの茶入れとともに用いてはならぬ。香炉や花瓶かびんを床の間にすえるにも、その場所を二等分してはならないから、ちょうどそのまん中に置かぬよう注意せねばならぬ。少しでも室内の単調の気味を破るために、床の間の柱は他の柱とは異なつた材木を用いねばならぬ。

この点においてもまた日本の室内装飾法は西洋の壁炉やその他の場所に物が均等に並べ

である装飾法と異なっている。西洋の家ではわれわれから見れば無用の重複と思われるものにはしばしば出くわすことがある。背後からその人の全身像がじつとこちらを見ている人と対談するのはつらいことである。肖像の人か、語っている人か、いずれが真のその人であろうかといぶかり、その一方はにせ物に違いないという妙な確信をいだいてくる。お祝いの饗宴きょうえんに連なりながら食堂の壁に描かれたたくさんのものをつくづくながめて、ひそかに消化の傷害をおこしたことは幾度も幾度もある。何ゆえにこのような遊獵の獲物を描いたものや魚類果物くだものの丹精たんせいこめた彫刻をおくのであるか。何ゆえに家伝の金銀食器を取り出して、かつてそれを用いて食事をし今はなき人を思い出させるのであるか。

茶室は簡素にして俗を離れているから真に外界のわずらわしさを遠ざかった聖堂である。ただ茶室においてのみ人は落ち着いて美の崇拜に身をささげることができる。十六世紀日本の改造統一にあずかった政治家やたけき武士もののふにとって茶室はありがたい休養所となった。十七世紀徳川治世のきびしい儀式固守主義の発達した後は、茶室は芸術的精神と自由に交通する唯一の機会を与えてくれた。偉大なる芸術品の前には大名も武士も平民も差別はなかった。今日は工業主義のために真に風流を楽しむことは世界至るところますます困難になって行く。われわれは今までよりもいつそう茶室を必要とするのではなからうか。



## 第五章 芸術鑑賞

諸君は「琴ならし」という道教徒の物語を聞いたことがありますか。

大昔、竜門の峽谷に、これぞ真の森の王と思われる古桐があった。頭はもた

げて星と語り、根は深く地中におろして、その青銅色のとぐる巻きは、地下に眠る銀

竜のそれとからまっていた。ところが、ある偉大な妖術者がこの木を切つて不思議

な琴をこしらえた。そしてその頑固な精を和らげるには、ただ樂聖の手にまつよりほかは

なかった。長い間その樂器は皇帝に秘蔵せられていたが、その弦から妙なる音をひき出そ

うと名手がかわるがわる努力してもそのかいは全くなかった。彼らのあらん限りの努力に

答えるものはただ輕侮の音、彼らのよろこんで歌おうとする歌とは不調和な琴の音ばかり

であった。

ついに伯牙という琴の名手が現われた。御しがたい馬をしずめようとする人のごとく、

彼はやさしく琴を撫し、静かに弦をたたいた。自然と四季を歌い、高山を歌い、流水を歌

えば、その古桐の追憶はすべて呼び起こされた。再び和らかい春風はその枝の間に戯れた。峽谷をおどりながら下つてゆく若い奔流は、つぼみの花に向かつて笑つた。たちまち聞こえるのは夢のごとき、数知れぬ夏の虫の声、雨のばらばらと和らかに落ちる音、悲しげな郭公の声。聞け！ 虎うそぶいて、谷これにこたえている。秋の曲を奏すれば、物さびしき夜に、劍のごとき鋭い月は、霜のおく草葉に輝いている。冬の曲となれば、雪空に白鳥の群れ渦巻き、霰はばらばらと、嬉々として枝を打つ。

次に伯牙は調べを変えて恋を歌つた。森は深く思案にくれている熱烈な恋人のようにゆらいだ。空にはつんとした乙女のような冴えた美しい雲が飛んだ。しかし失望のような黒い長い影を地上にひいて過ぎて行つた。さらに調べを変えて戦いを歌い、劍戟の響きや駒の蹄の音を歌つた。すると、琴中に竜門の暴風雨起こり、竜は電光に乗り、轟々たる雪崩は山々に鳴り渡つた。帝王は狂喜して、伯牙に彼の成功の秘訣の存するところを尋ねた。彼は答えて言つた、「陛下、他の人々は自己の事ばかり歌つたから失敗したのであります。私は琴にその樂想を選ぶことを任せて、琴が伯牙か伯牙が琴か、ほんとうに自分にもわかりませんでした。」と。

この物語は芸術鑑賞の極意をよく説明している。傑作というものはわれわれの心琴にか

なでる一種の交響樂である。眞の芸術は伯牙であり、われわれは竜門の琴である。美の靈手に触れる時、わが心琴の神秘の弦は目ざめ、われわれはこれに呼応して振動し、肉をおどらせ血をわかす。心は心と語る。無言のものに耳を傾け、見えないものを凝視する。名匠はわれわれの知らぬ調べを呼び起こす。長く忘れていた追憶はすべて新しい意味をもつてかえつて来る。恐怖におさえられていた希望や、認める勇氣のなかつた憧憬どうけいが、榮はえばえと現われて来る。わが心は画家の絵の具を塗る画布である。その色素はわれわれの感情である。その濃淡の配合は、喜びの光であり悲しみの影である。われわれは傑作によって存するごとく、傑作はわれわれによつて存する。

美術鑑賞に必要な同情ある心の交通は、互譲の精神によらなければならぬ。美術家は通信を伝える道を心得ていなければならぬように、観覧者は通信を受けるに適當な態度を養わなければならぬ。宗匠こぼりえん小堀遠州しゅうは、みずから大名でありながら、次のような忘れがたい言葉を残している。「偉大な絵画に接するには、王侯に接するごとくせよ。」傑作を理解しようとするには、その前に身を低うして息を殺し、一言一句も聞きもらさじと待つていなければならぬ。宋そうのある有名な批評家が、非常におもしろい自白をしていゝ。「若いころには、おのが好む絵を描く名人を称揚したが、鑑識力の熟するに従つて、

おのが好みに適するように、名人たちが選んだ絵を好むおのれを称した。」現今、名人の気分を骨を折って研究する者が実に少ないのは、誠に歎かわしいことである。われわれは、手のつけようのない無知のために、この造作ぞうさくのない礼儀を尽くすことをいとう。こうして、眼前に広げられた美の饗きやう 応おうにもあずからないことがしばしばある。名人にはいつでもごちそうの用意があるが、われわれはただみずから味わう力がないために飢えている。

同情ある人に対しては、傑作が生きた実在となり、僚友関係のよしみでこれに引きつけられるこちがする。名人は不朽である。というのは、その愛もその憂うれいも、幾度も繰り返してわれわれの心に生き残って行くから。われわれの心に訴えるものは、伎倆ぎりようというよりは精神であり、技術というよりも人物である。呼び声が人間味のあるものであれば、それだけにわれわれの応答は衷心から出て来る。名人とわれわれの間に、この内密の默契があればこそ詩や小説を読んで、その主人公とともに苦しみ共に喜ぶのである。わが国の沙翁しゃおう 近松ちかまつは劇作の第一原則の一つとして、見る人に作者の秘密を打ち明かす事が重要であると定めた。弟子でしたちの中には幾人も、脚本をさし出して彼の称賛を得ようとした者があったが、その中で彼がおもしろいと思つたのはただ一つであった。それは、ふたこの兄弟が、人違いのために苦しむという『まちがいつづき』に多少似ている脚本であった。

近松が言うには、「これこそ、劇本来の精神をそなえている。というのは、これは見る人を考えに入れていいるから公衆が役者よりも多く知ることを許されている。公衆は誤りの因を知っていて、哀れにも、罪もなく運命の手におちて行く舞台の上の人々を哀れむ。」と。大家は、東西両洋ともに、見る人を腹心の友とする手段として、暗示の価値を決して忘れなかった。傑作をうちながめる人たれか心に浮かぶ綿々たる無限の思いに、畏敬いけいの念をおこさない者があろう。傑作はすべて、いかにも親しみあり、肝胆相照らしているではないか。これにひきかえ、現代の平凡な作品はいかにも冷ややかなものではないか。前者においては、作者の心のあたたかい流露を感じ、後者においては、ただ形式的の会釈りゆうを感じるのみである。現代人は、技術に没頭して、おのれの域を脱することはまれである。竜りゆう門もんの琴を、なんのいかいもなくかき鳴らそうとした楽人のごとく、ただおのれを歌うのみであるから、その作品は、科学には近からうけれども、人情を離れること遠いのである。日本の古い俚諺りげんに「見えはる男には惚ほれられぬ。」というのがある。そのわけは、そういう男の心には、愛を注いで満たすべきすきまがないからである。芸術においてもこれと等しく、虚栄は芸術家公衆いずれにおいても同情心を害することはなほだしいものである。

芸術において、類縁の精神が合一するほど世にも神聖なものはない。その会するやたち

まちにして芸術愛好者は自己を超越する。彼は存在すると同時に存在しない。彼は永劫えいじゆうを瞥見べっけんするけれども、目には舌なく、言葉をもってその喜びを声に表わすことはできない。彼の精神は、物質の束縛を脱して、物のリズムによって動いている。かくのごとくして芸術は宗教に近づいて人間をけだかくするものである。これによってこそ傑作は神聖なものとなるのである。昔日本人が大芸術家の作品を崇敬したことは非常なものであった。茶人たちはその秘蔵の作品を守るに、宗教的秘密をもってしたから、御神龕ごしんかん（絹地の包みで、その中へやわらかに包んで奥の院が納めてある）まで達するには、幾重にもある箱をすつかり開かねばならないことがしばしばあった。その作品が人目にふれることはきわめてまれで、しかも奥義を授かった人にもみ限られていた。

茶道の盛んであった時代においては、太閤たいこうの諸將は戦勝の褒美ほうびとして、広大な領地を賜わるよりも、珍しい美術品を贈られることを、いつそう満足に思ったものであった。わが国で人気ある劇の中には、有名な傑作の喪失回復に基づいて書いたものが多い。たとえば、ある劇にこういう話がある。細川侯ほそかわこうの御殿には雪村せつそんの描いた有名な達磨だるまがあつたが、その御殿が、守りの侍の怠慢から火災にかかった。侍は万事を賭してと、この宝を救い出そうと決心して、燃える御殿に飛び入って、例の掛け物をつかんだ、が、見ればはや、

火炎にさえぎられて、のがれる道はなかったのである。彼は、ただその絵のこのみを中心に掛けて、剣をもつておのが肉を切り開き、裂いた袖そでに雪村を包んで、大きく開いた傷口にこれをつ込んだ。火事はいにしずまった。煙る余燼よじんの中に、半焼の死骸しかがいがあつた。その中に、火の災いをこうむらないで、例の宝物は納まつていた。実に身の毛もよだつ物語であるが、これによつて、信頼を受けた侍の忠節はもちろんのこと、わが国人がいかに傑作品を重んじるかということが説明される。

しかしながら、美術の価値はただそれがわれわれに語る程度によるものであることを忘れてはならない。その言葉は、もしわれわれの同情が普遍的であつたならば、普遍的なものであるかもしれない。が、われわれの限定せられた性質、代々相伝の本性はもちろんのこと、慣例、因襲の力は美術鑑賞力の範囲を制限するものである。われらの個性さえも、ある意味においてわれわれの理解力に制限を設けるものである。そして、われらの審美的個性は、過去の創作品の中に自己の類縁を求め、もつとも、修養によつて美術鑑賞力は増大するものであつて、われわれはこれまで認められなかつた多くの美の表現を味わうことができるようになるものである。が、ひつきょう畢竟するところ、われわれは万有の中に自分の姿を見るに過ぎないのである。すなわちわれら特有の性質がわれらの理解方式を定め

るのである。茶人たちは全く各人個々の鑑賞力の及ぶ範囲内の物のみを収集した。

これに連関して小堀遠州に関する話を思い出す。遠州はかつてその門人たちから、彼が収集する物の好みに現われている立派な趣味を、お世辞を言つてほめられた。「どのお品も、実に立派なもので、人皆嘆賞おくあたわざるところであります。これによつて先生は、利休にもまさる趣味をお持ちになつてゐることがわかります。というのは、利休の集めた物は、ただ千人に一人しか真にわかるものがいなかつたのでありますから。」と。遠州は歎じて、「これはただいかにも自分が凡俗であることを証するのみである。偉い利休は、自分だけにおもしろいと思われる物をのみ愛好する勇氣があつたのだ。しかるに私は、知らず知らず一般の人の趣味にこびてゐる。実際、利休は千人に一人の宗匠であつた。」と答えた。

実に遺憾にたえないことには、現今美術に対する表面的の熱狂は、真の感じに根柢をおいていない。われわれのこの民本主義の時代においては、人は自己の感情には無頓着むとんじゃくに世間一般から最も良いと考えられている物を得ようとかしましく騒ぐ。高雅なものではなくて、高価なものを欲し、美しいものではなくて、流行品を欲するのである。一般民衆にとっては、彼らみずからの工業主義の尊い産物である絵入りの定期刊行物をながめるほう



が、彼らが感心したふりをして、初期のイタリア作品や、足利時代の傑作よりも美術鑑賞の糧かてとしてもつと消化しやすであろう。彼らにとつては、作品の良否よりも美術家の名が重要である。数世紀前、シナのある批評家の歎じたごとく、世人は耳によつて絵画を批評する。今日いづれの方面を見ても、擬古典的嫌悪けんおを感じるの、すなわちこの眞の鑑賞力の欠けているためである。

なお一つ一般に誤つてゐることは、美術と考古学の混同である。古物から生ずる崇敬の念は、人間の性質の中で最もよい特性であつて、いつそうこれを涵養かんようしたいものである。古いにしえの大家は、後世啓発の道を開いたことに対して、当然尊敬をうくべきである。彼らは幾世紀の批評を経て、無傷のままわれわれの時代に至り、今もなお光榮を荷にのうてゐるといふだけで、われわれは彼らに敬意を表している。が、もしわれわれが、彼らの偉業を単に年代の古きゆえをもつて尊んだとしたならば、それは実に愚かなことである。しかもわれわれは、自己の歴史的同情心が、審美的眼識を無視するままに許している。美術家が無事に墳墓におさめられると、われわれは称賛の花を手向たむけるのである。進化論の盛んであつた十九世紀には、人類のことを考えて個人を忘れる習慣が作られた。収集家は一時期あるいは一派を説明する資料を得んことを切望して、ただ一個の傑作がよく、一定の時期ある

いは一派のいかなる多数の凡俗な作にもまさつて、われわれを教えるものであるということを忘れてゐる。われわれはあまりに分類し過ぎて、あまりに楽しむことが少ない。いわゆる科学的方法の陳列のために、審美的方法を犠牲にしたことは、これまで多くの博物館の害毒であつた。

同時代美術の要求は、人生の重要な計画において、いかなるものにもこれを無視することはできない。今日の美術は真にわれわれに属するものである、それはわれわれみずからの反映である。これを罵倒ばとうする時は、ただ自己を罵倒するのである。今の世に美術無し、というが、これが責めを負うべき者はたれぞ。古人に対しては、熱狂的に嘆賞するにもかかわらず、自己の可能性にはほとんど注意しないことは恥すべきことである。世に認められようとして苦しむ美術家たち、冷たき軽侮の影にしゆんじゆん 巡しゆんしている疲れた人々よ！ などというが、この自己本位の世の中に、われわれは彼らに対してどれほどの鼓舞激励を与えているか。過去がわれらの文化の貧弱を哀れむのも道理である。未来はわが美術の貧弱を笑うであろう。われわれは人生の美しい物を破壊することによって美術を破壊している。ねがわくは、ある大だい妖術ようじゆつ者しやが出現して、社会の幹から、天才の手に触れて始めて鳴り渡る弦をそなえた大琴を作らんことを祈る。



## 第六章 花

春の東雲しののめのふるえる薄明に、小鳥が木の間で、わけのありそうな調子でささやいて  
いる時、諸君は彼らがそのつれあいに花のことを語っているのだと感じたことはありません  
か。人間について見れば、花を觀賞することはどうも恋愛の詩と時を同じくして起こつて  
いるようである。無意識のゆえに麗しく、沈黙のために芳しい花の姿でなくて、どこに処お  
女とめの心の解ける姿を想像することができよう。原始時代の人はその恋人に初めて花輪をさ  
さげると、それによつて獸性を脱した。彼はこうして、粗野な自然の必要を超越して人間  
らしくなった。彼が不必要な物の微妙な用途を認めたと時、彼は芸術の国に入ったのである。  
喜びにも悲しみにも、花はわれらの不断の友である。花とともに飲み、共に食らい、共  
に歌い、共に踊り、共に戯れる。花を飾つて結婚の式をあげ、花をもって命名の式を行な  
う。花がなくては死んでも行けぬ。百合ゆりの花をもって礼拝し、蓮はすの花をもって冥めい想そうに入  
り、ばらや菊花をつけ、戦列を作つて突撃した。さらに花言葉で話そうとまで企てた。花

なくてどうして生きて行かれよう。花を奪われた世界を考えてみても恐ろしい。病める人の枕まくらべに非常な慰安をもたらし、疲れた人々の闇やみの世界に喜悅の光をもたらすものではないか。その澄みきつた淡い色は、ちょうど美しい子供をしみじみながめていると失われた希望が思い起こされるように、失われようとしている宇宙に対する信念を回復してくれる。われらが土に葬られる時、われらの墓辺を、悲しみに沈んで低てい徊かいするものは花である。

悲しいかな、われわれは花を不断の友としながらも、いまだ禽きん獣じゆうの域を脱することあまり遠くないという事実をおおうことはできぬ。羊の皮をむいて見れば、心の奥おくの狼おおかみはすぐにその齒をあらわすであろう。世間で、人間は十で禽獣、二十で発狂、三十で失敗、四十で山師、五十で罪人といっている。たぶん人間はいつまでも禽獣を脱しないから罪人となるのであろう。飢渴のほか何物もわれわれに対して真実なものはなく、われらみずからの煩ぼん悩のうのほか何物も神聖なものはない。神社仏閣は、次から次へとわれらのまのあたり崩壊ほうかいして来たが、ただ一つの祭壇、すなわちその上で至高の神へ香を焚たく「おのれ」という祭壇は永遠に保存せられている。われらの神は偉いものだ。金銭がその予言者だ！われらは神へ奉納するために自然を荒らしている物質を征服したと誇っているが、物質こそわれわれを奴隷にしたものであるということは忘れてゐる。われらは教養や風流に名

をかりて、なんとという残忍非道を行なっているのであろう！

星の涙のしたたりのやさしい花よ、園に立つて、日の光や露の玉をたたえて歌う蜜蜂みつばちに、会釈してうなずいている花よ、お前たちは、お前たちを待ち構えている恐ろしい運命を承知しているのか。夏のそよ風にあたつて、そうしていられる間、いつまでも夢を見て、風に揺られて浮かれ気分が暮らすがよい。あすにも無慈悲な手が咽喉のどを取り巻くだろう。

お前はよじ取られて手足を一つ一つ引きさかれ、お前の静かな家から連れて行ってしまわれるだろう。そのあさましの者はすてきな美人であるかもしれぬ。そして、お前の血でその女の指がまだ湿っている間は、「まあなんて美しい花だこと。」というかもしれぬ。だがね、これが親切なことだろうか。お前が、無情なやつだと承知している者の髪の中に閉じ込められたり、もしお前が人間であつたらまともに見向いてくれそうにもない人のボタン穴にさされたりするのが、お前の宿命なのかもしれぬ。何か狭い器に監禁せられて、ただわずかのたまり水によつて、命の衰え行くのを警告する狂わんばかりの渴かわきを止めていゝるのもお前の運命なのかもしれぬ。

花よ、もし御門みかどの国にいるならば、鋏はさみと小鋸このこぎりに身を固めた恐ろしい人にいつか会うかもしれぬ。その人はみずから「生花の宗匠」と称している。彼は医者いしやの権利を要求する。

だから、自然彼がきらいになるだろう。というのは、医者というものはその犠牲になつた人のわずらいをいつも長びかせようとする者だからね。彼はお前たちを切つてかめゆがめて、彼の勝手な考えでお前たちの取るべき姿勢をきめて、途方もない変な姿にするだろう。もみ療治をする者のようにお前たちの筋肉を曲げ、骨を違わせるだろう。出血を止めるために、灼しやく熱ねつした炭でお前たちを焦がしたり、循環を助けるためにかからだの中へ針金をさし込むこともある。塩、酢、明礬みょうばん、時には硫酸を食事に与えることもある。

お前たちは今にも氣絶しそうな時に、煮え湯を足に注がれることもある。彼の治療を受けない場合に比べると、二週間以上も長くお前たちの体内に生命を保たせておくことができるのを彼は誇りとしているだろう。お前たちは初めて捕えられた時、その場で殺されたほうがよくはなかつたか。いったいお前は前世でどんな罪を犯したとて、現世でこんな罰を当然受けねばならないのか。

西洋の社会における花の浪費は東洋の宗匠の花の扱い方よりもさらに驚き入つたものである。舞踏室や宴会の席を飾るために日々切り取られ、翌日は投げ捨てられる花の数はなかなか莫ばくだい大なものに違いない。いつしよにつないだら一大陸を花輪で飾ることもできよう。このような、花の命を全く物とも思わぬことに比ぶれば、花の宗匠の罪は取るに足ら

ないものである。彼は少なくとも自然の経済を重んじて、注意深い慮おもんばかりをもつてその犠牲者を選び、死後はその遺骸いがいに敬意を表する。西洋においては、花を飾るのは富を表わす一時的美観の一部、すなわちその場の思いつきであるように思われる。これらの花は皆その騒ぎの済んだあととはどこへ行くのであろう。しおれた花が無情にも糞土ふんどの上に捨てられて、いるのを見るほど、世にも哀れなものはない。

どうして花はかくも美しく生まれて、しかもかくまで薄命なのであろう。虫でも刺すことができる。最も温順な動物でも追いつめられると戦うものである。ボンネットを飾るために羽毛をねらわれている鳥はその追いつめられ飛去ることができる、人が上着にしたいとむさぼる毛皮のある獣は、人が近づけば隠れることができる。悲しいかな！ 翼ある唯一の花と知られているのは蝶ちょうであつて、他の花は皆、破壊者に会つてはどうすることもできない。彼らが断末魔の苦しみに叫んだとしても、その声はわれらの無情の耳へは決して達しない。われわれは、黙々としてわれらに仕えわれらを愛する人々に対して絶えず残忍であるが、これがために、これらの最もよき友からわれわれが見捨てられる時が来るかもしれない。諸君は、野生の花が年々少なくなつてゆくのに気はつきませんか。それは彼らの中の賢人どもが、人がもつと人情のあるようになるまでこの世から去れと彼らに言つてき



かせたのかもしれない。たぶん彼らは天へ移住してしまつたのであろう。

草花を作る人のためには大いに肩を持つてやつてもよい。植木鉢をいじる人は花はな はなばき

鉢みの人よりもはるかに人情がある。彼が水や日光について心配したり、寄生虫を相手に争つたり、霜を恐れたり、芽の出ようがおそい時は心配し、葉に光沢が出て来ると有頂天になつて喜ぶ様子をうかがつてゐるのは楽しいものである。東洋では花卉栽培の道は非常に古いものであつて、詩人の嗜好しこうとその愛好する花卉はしばしば物語や歌にしろされてゐる。唐宋とうそうの時代には陶器術の発達に伴なつて、花卉を入れる驚くべき器が作られたといふことである。といつても植木鉢ではなく寶石をちりばめた御殿であつた。花ごとに仕える特使が派遣せられ、兎うさぎの毛で作つたやわらかい刷毛はけでその葉を洗うのであつた。牡丹ぼたんは、盛装した美しい侍女が水を与うべきもの、寒梅は青い顔をしてほっそりとした修道僧が水をやるべきものと書いた本がある。日本で、足利あしかが時代に作られた「鉢はちの木」という最も通俗な能の舞は、貧困な武士がある寒夜に炉に焚たく薪まきがないので、旅僧を歓待するために、だいじに育てた鉢の木を切るといふ話に基づいて書いたものである。その僧とは実はわが物語のハルンアルラシッド（三一）ともいふべき北条ほうじょう時頼ときよりにほかならなかつた。そしてその犠牲に対しては報酬なしではなかつた。この舞は現今でも必ず東京の観客の涙を誘

うものである。

か弱い花を保護するためには、非常な警戒をしたものであった。唐の玄宗皇帝は、鳥を近づけないために花園の樹枝に小さい金の鈴をかけておいた。春の日に宮廷の楽人を率いていで、美しい音楽で花を喜ばせたのも彼であった。わが国のアーサー王物語の主人公ともいふべき、義経の書いたものだという伝説のある、奇妙な高札が日本のある寺院（須磨寺）に現存している。それはある不思議な梅の木を保護するために掲げられた揭示であつて、尚武時代のすいおかしみをもつてわれらの心に訴える。梅花の美しさを述べた後「一枝を伐らば一指を剪るべし。」という文が書いてある。花をむやみに切り捨てたり、美術品をばだいなしにする者どもに対しては、今日においてもこういう法律が願わくは実施せられよかしと思う。

しかし鉢植えの花の場合でさえ、人間の勝手気ままな事が感ぜられる気がする。何ゆえに花をそのふるさとから連れ出して、知らぬ他郷に咲かせようとするのであるか。それは小鳥を籠に閉じこめて、歌わせようとするのも同じではないか。蘭類が温室で、人工の熱によつて息づまる思いをしながら、なつかしい南国の空を一目見たいとあてもなくあこがれているとだれが知つていよう。

花を理想的に愛する人は、破れた籬まがきの前に座して野菊と語った陶淵明とうえんめいや、たそがれに、西湖せいこの梅花の間を逍遙しょうようしながら、暗香浮動の趣に我れを忘れた林和靖りんかせいのごとく、花の生まれ故郷に花をたずねる人々である。周茂叔しゅうもしゆくは、彼の夢が蓮はすの花の夢と混ざるように、舟中に眠つたと伝えられている。この精神こそは奈良朝ならちようで有名な光明皇后こうみょうこうごうのこころみ心を動かしたものであつて、「折りつればたぶさにけがるたてながら三世みやの仏に花たてまつる(三二)。」とお詠よみになつた。

しかしあまりに感傷的になることはやめよう。奢わじる事をいっそういましめて、もつと壮大な気持ちにならうではないか。老子いわく「天地不仁(三三)。」弘法大師こうぼうだいしいわく「生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥くらし(三四)。」われわれはいずれに向かつても「破壊」に面するのである。上に向かうも破壊、下に向かうも破壊、前にも破壊、後ろにも破壊。変化こそは唯一の永遠である。何ゆえに死を生のごとく喜び迎えないのであるか。この二者はただ互いに相對しているものであつて、梵ブラーマン(三五)の昼と夜である。古きものの崩解によつて改造が可能となる。われわれは、無情な慈悲の神「死」をば種々の名前であがめて来た。拜火教徒が火中に迎えたものは、「すべてを呑噬どんぜいするもの」の影であつた。今日でも、神道の日本人がその前にひ

れ伏すところのものは、つるぎだまし劍魂の氷のような純潔である。神秘の火はわれらの弱点を焼きつくし、神聖な劍はほんのう煩惱のきずなを断つ。われらの屍灰しかいの中から天上の望みという不死の鳥が現われ、煩惱を脱していつそう高い人格が生まれ出て来る。

花をちぎる事によつて、新たな形を生み出して世人の考えをこうしやう高尚にする事ができるならば、そうしてもよいではないか。われわれが花に求むるところはただ美に対する奉納を共にせん事にあるのみ。われわれは「純潔」と「清楚せいそ」に身をささげる事によつてその罪滅ぼしをしよう。こういうふうな論法で、茶人たちは生花の法を定めたのである。

わが茶や花の宗匠のやり口を知っている人はだれでも、彼らが宗教的の尊敬をもつて花を見る事に気がついたに違いない。彼らは一枝一条もみだりに切り取る事をしないで、おのが心に描く美的配合を目的に注意深く選択する。彼らは、もし絶対に必要の度を越えて万一切り取るようなことがあると、これを恥とした。これに関連して言つてもよろしいと思われる事は、彼らはいつても、多少でも葉があればこれを花に添えておくという事である。というのは、彼らの目的は花の生活の全美を表わすにあるから。この点については、その他の多くの点におけると同様、彼らの方法は西洋諸国に行なわれるものとは異なっている。かの国では、花梗かこうのみ、いわば胴のない頭だけが乱雑に花瓶かびんにさしこんであるのをよく見

受ける。

茶の宗匠が花を満足に生けると、彼はそれを日本間の上座にあたる床の間に置く。その効果を妨げるような物はいつさいその近くにはおかない。たとえば一幅の絵でも、その配合に何か特殊の審美的理由がなければならぬ。花はそこに王位についた皇子のようにすわっている、そして客やお弟子<sup>でし</sup>たちは、その室に入るやまずこれに丁寧なおじぎをしてから始めて主人に挨拶<sup>あいさつ</sup>をする。生花の傑作を写した絵が素人<sup>しろうと</sup>のために出版せられている。この事に関する文献はかなり大部なものである。花が色あせると宗匠はねんごろにそれを川に流し、または丁寧<sup>ていねい</sup>に地中に埋める。その霊を吊つて墓碑を建てる事さえもある。

花道の生まれたのは十五世紀で、茶の湯の起こつたのと同時らしく思われる。わが国の伝説によると、始めて花を生けたのは昔の仏教徒であると言う。彼らは生物に対する限りなき心やりのあまり、暴風に散らされた花を集めて、それを水おけに入れたということである。足利義政<sup>あしかがよしまさ</sup>時代の大画家であり、鑑定家<sup>せんてい</sup>である相阿弥<sup>そうあみ</sup>は、初期における花道の大家の一人であつたといわれている。茶人珠光<sup>しゆこう</sup>はその門人であつた。また絵画における狩野家<sup>のう</sup>のように、花道の記録に有名な池の坊の家元専能<sup>せんのう</sup>もこの人の門人であつた。十六世紀の後半において、利休によつて茶道が完成せられるとともに、生花も充分なる発達を遂

げた。利休およびその流れをくんだ有名な織田有楽、古田織部、光悦、小堀遠州、片桐石州らは新たな配合を作ろうとして互いに相競った。しかし茶人たちの花の尊崇は、ただ彼らの審美的儀式の一部をなしたに過ぎないのであって、それだけが独立して、別の儀式をなしてはいなかったという事を忘れてはならぬ。生花は茶室にある他の美術品と同様に、装飾の全配合に従属的なものであった。ゆえに石州は「雪が庭に積んでいる時は白い梅花を用いてはならぬ。」と規定した。「けばけばしい」花は無情にも茶室から遠ざけられた。茶人の生けた生花はその本来の目的の場所から取り去ればその趣旨を失うものである。と言うのは、その線やつり合いは特にその周囲のものとの配合を考えてくふうしてあるのであるから。

花を花だけのために崇拜する事は、十七世紀の中葉、花の宗匠が出るようになって起ったのである。そうなると茶室には関係なく、ただ花瓶が課する法則のほかには全く法則がなくなつた。新しい考案、新しい方法ができるようになって、これらから生まれ出た原則や流派がたくさんあつた。十九世紀のある文人の言うところによれば、百以上の異なつた生花の流派をあげる事ができる。広く言えばこれら諸流は、形式派と写実派の二大流派に分かれる。池の坊を家元とする形式派は、狩野派に相当する古典的理想主義をねらつて

いた。初期のこの派の宗匠の生花の記録があるが、それは山雪さんせつや常信つねのぶの花の絵をほとんどそのままにうつし出したものである。一方写実派はその名の示すごとく、自然をそのモデルと思つて、ただ美的調和を表現する助けとなるような形の修正を加えただけである。ゆえにこの派の作には浮世絵や四条派の絵をなしている気分と同じ気分が認められる。

時の余裕があれば、この時代の幾多の花の宗匠の定めた生花の法則になお詳細に立ち入つて、徳川時代の装飾を支配していた根本原理を明らかにすること（そうすれば明らかになると思われるが）は興味あることであろう。彼らは導く原理（天）、従う原理（地）、和の原理（人）のことを述べている、そしてこれらの原理をかたどらない生花は没趣味な死んだ花であると考えられた。また花を、正式、半正式、略式の三つの異なつた姿に生ける必要を詳述している。第一は舞踏場へ出るものものしい服装をした花の姿を現わし、第二はゆつたりとした趣のある午後服の姿を現わし、第三は閨房けいぼうにある美しい平常着の姿を現わすともいわれよう。

われらは花の宗匠の生花よりも茶人の生花に対してひそかに同情を持つ。茶人の花は、適当に生けると芸術であつて、人生と真に密接な関係を持つているからわれわれの心に訴えるのである。この流派を、写実派および形式派と対称区別して、自然派と呼びたい。茶

人たちは、花を選択することでかれらのなすべきことは終わったと考えて、その他のことは花みずからの身の上話にまかせた。晩冬のころ茶室に入れば、野桜の小枝につぼみの椿つばきの取りあわせてあるのを見る。それは去らんとする冬のなごりときたらんとする春の予告を配合したものである。またいらいらするような暑い夏の日に、昼のお茶に行つて見れば、床の間の薄暗い涼しい所にかかつている花瓶かびんには、一輪の百合ゆりを見るであろう。露のしたたる姿は、人生の愚かさを笑っているように思われる。

花の独奏ソロはおもしろいものであるが、絵画、彫刻の協奏曲コンチエルトとなれば、その取りあわせには人を恍惚こうこつとさせるものがある。石州はかつて湖沼の草木を思わせるように水盤に水草を生けて、上の壁には相阿弥そうあみの描いた鴨かもの空を飛ぶ絵をかけた。紹巴じょうはという茶人は、海辺の野花と漁家の形をした青銅の香炉に配するに、海岸のさびしい美しさを歌つた和歌をもつてした。その客人の一人は、その全配合の中に晩秋の微風を感じたとしている。花物語は尽きないが、もう一つだけ語ることにしよう。十六世紀には、朝顔はまだわれわれに珍しかった。利休は庭全体にそれを植えさせて、丹精たんせいこめて培養した。利休の朝顔の名が太閤たいこうのお耳に達すると太閤はそれを見たいと仰せいだされた。そこで利休はわが家の朝の茶の湯へお招きをした。その日になって太閤は庭じゆうを歩いてごらんになつ



たが、どこを見ても朝顔のあとかたも見えなかった。地面は平らかにして美しい小石や砂がまいてあった。その暴君はむつとした様子で茶室へはいった。しかしそこにはみごとなものも待っていて彼のきげんは全くなおつて来た。床の間には宋細工そうざいくの珍しい青銅の器に、全庭園の女王である一輪の朝顔があった。

こういう例を見ると、「花御供はなごつく」の意味が充分にわかる。たぶん花も充分にその真の意味を知るであろう。彼らは人間のような卑怯者ひきょうものではない。花によっては死を誇りとするものもある。たしかに日本の桜花は、風に身を任せて片々と落ちる時これを誇るものであろう。吉野よしのや嵐あらし山やまのかおる雪崩なだれの前に立ったことのある人は、だれでもきつとそう感じたであろう。寶石をちりばめた雲のごとく飛ぶことしばし、また水晶の流れの上に舞い、落ちては笑う波の上に身を浮かべて流れながら「いざさらば春よ、われらは永遠の旅に行く。」というようである。

## 第七章 茶の宗匠

宗教においては未来がわれらの背後にある。芸術においては現在が永遠である。茶の宗匠の考えによれば芸術を真に鑑賞することは、ただ芸術から生きた力を生み出す人々のみ可能である。ゆえに彼らは茶室において得た風流の高い軌範によって彼らの日常生活を律しようとする。すべての場合に心の平静を保たねばならぬ、そして談話は周囲の調和を決して乱さないように行なわなければならぬ。着物の格好や色彩、身体の均衡や歩行の様子などすべてが芸術的人格の表現でなければならぬ。これらの事がらは軽視することのできないものであった。というのは、人はおのれを美しくして始めて美に近づく権利が生まれるのであるから。かようにして宗匠たちはただの芸術家以上のものすなわち芸術そのものとなろうと努めた。それは審美主義の禅であった。われらに認めたい心さえあれば完全は至るところにある。利休は好んで次の古歌を引用した。

花をのみ待つらん人に山里の雪間の草の春を見せばや（三六）

茶の宗匠たちの芸術に対する貢献は実に多方面にわたっていた。彼らは古典的建築および屋内の装飾を全く革新して、前に茶室の章で述べた新しい型を確立した。その影響は十六世紀以後に建てられた宮殿寺院さえも皆これをうけている。多能な小堀遠州は、桂の離宮、名古屋の城および孤篷庵に、彼が天才の著名な実例をのこしている。日本の有名な庭園は皆茶人によつて設計せられたものである。わが国の陶器はもし彼らが鼓舞を与えてくれなかつたら、優良な品質にはたぶんならなかつたであろう。茶の湯に用いられた器具の製造のために、製陶業者のほうではあらん限りの新しくふうの知恵を絞つたのであつた。遠州の七窯なながまは日本の陶器研究者の皆よく知つているところである。わが国の織物の中には、その色彩や意匠を考案した宗匠の名を持つていものが多い。実際、芸術のいかなる方面にも、茶の宗匠がその天才の跡をのこしていないところは少ない。絵画、漆器に關しては彼らの尽くした莫大ばくだいの貢献についていうのはほとんど贅言ぜいげんと思われる。絵画の一大派はその源を、茶人であり同時にまた塗師ぬし、陶器師として有名な本阿弥光悦ほんあみこうえつに発している。彼の作品に比すれば、その孫の光甫こうほや甥おいの子光琳こうりんおよび乾山けんざんの立派な作もほとんど光を失うのである。いわゆる光琳派はすべて、茶道の表現である。この派の描く太い線の中に、自然そのものの生氣が存するように思われる。

茶の宗匠が芸術界に及ぼした影響は偉大なものではあったが、彼らが処世上に及ぼした影響の大なるに比すれば、ほとんど取るに足らないものである。上流社会の慣例におけるのみならず、家庭の些事さじの整理に至るまで、われわれは茶の宗匠の存在を感じるのである。配膳はいぜんぼう法はもとより、美味の膳部の多くは彼らの創案したものである。彼らは落ち着いた色の衣服をのみ着用せよと教えた。また生花に接する正しい精神を教えてくれた。彼らは、人間は生来簡素を愛するものであると強調して、人情の美しさを示してくれた。実際、彼らの教えによつて茶は国民の生活の中にはいったのである。

この人生という、愚かな苦勞の波の騒がしい海の上の生活を、適当に律してゆく道を知らない人々は、外観は幸福に、安んじているようにと努めながらも、そのかいもなく絶えず悲惨な状態にいる。われわれは心の安定を保とうとしてはよろめき、水平線上に浮かぶ雲にことごとく暴風雨の前兆を見る。しかしながら、永遠に向かつて押し寄せる波濤はとうのうねりの中に、喜びと美しさが存している。何ゆえにその心をくまないのであるか、また列子のごとく風そのものに御ぎよしないのであるか。

美を友として世を送った人のみが麗しい往生をすることができる。大宗匠たちの臨終はその生しょうがい涯がいと同様に絶妙都雅なものであった。彼らは常に宇宙の大調和と和しようとして努

め、いつでも冥土へ行くの覚悟をしていた。利休の「最後の茶の湯」は悲壯の極として永久にかがやくであろう。

利休と太閤秀吉との友誼は長いものであつて、この偉大な武人が茶の宗匠を尊重したことも非常なものであつた。しかし暴君の友誼はいつも危険な光榮である。その時代は不信にみちた時代であつて、人は近親の者さえも信頼しなかつた。利休は媚びへつらう佞人ではなかつたから、恐ろしい彼の後援者と議論して、しばしば意見を異にするをまはばからなかつた。太閤と利休の間にしばらく冷やかな感情のあつたのを幸いに、利休を憎む者どもは利休がその暴君を毒害しようとする一味の連累であると言つた。宗匠のたてる一碗の綠色飲料とともに、命にかかわる毒薬が盛られることになつていふことが、ひそかに秀吉の耳にはいつた。秀吉においては、嫌疑があるというだけでも即時死刑にする充分な理由であつた、そしてその怒れる支配者の意に従うよりほかに哀訴の道もなかつたのである。死刑囚にただ一つの特権が許された、すなわち自害するという光榮である。

利休が自己犠牲をすることに定められた日に、彼はおもなる門人を最後の茶の湯に招いた。客は悲しげに定刻待合に集まつた。庭徑をながむれば樹木も戦慄するように思われ、木の葉のさらさらとそよぐ音にも、家なき亡者の私語が聞こえる。地獄の門前にいるま

じめくさつた番兵のように、灰色の燈籠とうろうが立っている。珍香の香が一時に茶室から浮動して来る。それは客にはいれとつげる招きである。一人ずつ進み出ておのおのその席につく。床の間には掛け物がかかっている、それは昔ある僧の手になつた不思議な書であつて浮世のはかなさをかいたものである。火鉢ひばちにかかつて沸いている茶釜ちやがまの音には、ゆく夏を惜しみ悲痛な思いを鳴いている蝉せみの声がする。やがて主人が室に入る。おのおの順次に茶をすすめられ、順次に黙々としてこれを飲みほして、最後に主人が飲む。定式に従つて、主賓がそこでお茶器拝見を願う。利休は例の掛け物とともにいろいろな品を客の前におく。皆の者がその美しさをたたえて後、利休はその器を一つずつ一座の者へ形見として贈る。茶わんのみは自分でとつておく。「不幸の人のくちびるによつて不浄になつた器は決して再び人間には使用させない。」と言つてかれはこれをなげうつて粉碎する。

その式は終わった、客は涙をおさえかね、最後の訣別けつべつをして室を出て行く。彼に最も親密な者がただ一人、あとに残つて最期を見届けてくれるようにと頼まれる。そこで利休は茶会の服を脱いで、だいじにたたんで畳の上におく、それでその時まで隠れていた清浄無垢むくな白い死に装束があらわれる。彼は短剣の輝く刀身を恍惚こうこつとながめて、次の絶唱を詠む。

笑<sup>え</sup>み<sup>を</sup>顔<sup>に</sup>う<sup>か</sup>べ<sup>な</sup>が<sup>ら</sup>、  
人生七十 力<sup>り</sup>圀<sup>き</sup>希<sup>い</sup>咄<sup>き</sup>と<sup>つ</sup> 吾<sup>わ</sup>が<sup>こ</sup>這<sup>こ</sup>の<sup>こ</sup>宝<sup>た</sup>劍<sup>けん</sup> 祖<sup>そ</sup>仏<sup>ぶつ</sup>共<sup>ども</sup>に<sup>と</sup>殺<sup>ころ</sup>す (三七)  
利<sup>り</sup>休<sup>きゅう</sup>は<sup>めい</sup>冥<sup>い</sup>土<sup>ど</sup>へ<sup>い</sup>行<sup>い</sup>つ<sup>た</sup>た<sup>の</sup>で<sup>あ</sup>つ<sup>た</sup>。





## 注

## 番号

- 一 『インド生活の組織』——The Sister Nivedita 著。
- 二 Paul Krausel 著、Dissertations, Berlin, 1902.
- 三 陸羽——字は鴻漸、桑苧翁と号した。唐の徳宗時代の人。
- 四 茶経には一之源、二之具、三之造とある。
- 五 胡人ののごとくなる者蹙縮然たり——如胡人者蹙縮然。は高くつ。蹙縮はの針縫いの所のしまり縮まるを言う。
- 六 牛の臆なる者廉※然たり——牛臆者廉※然。牛は野牛。廉※は衣装などの裁ち目たたみ目などのそろったさま。これは牛の臆むねのすじの通ったのを言う。
- 七 浮雲の山をいずる者輪菌然たり——浮雲出山者輪菌然。輪菌は丸くてねじける。雲のたちのぼるさまを言う。
- 八 輕颺の水を払う者涵澹然たり——輕颺払水者涵澹然。涵澹は水のさま。少し波立つ

状態を言う。

九 また新治の地なる者暴雨流潦の経る所に遇うがごとし——又如新治地着遇暴雨流潦之所経。新治の地は瓦礫がれきを去つたやわらかな土面、雨水にあつた跡を言う。潦は路上の流水。

一〇 風炉——灰うけ、風炉とは風を通すによつて名づける。今の風炉は名のみのものである。

一一 魚目——小さい湯玉を魚目にたとえる。

一二 縁辺の涌泉蓮珠——湯のにえあがるのを泉にたとえ、湯玉の多いのを連珠にたとえる。

一三 騰波鼓浪——波だち、波うつ。

一四 「華」——茶気。

一五 晴天爽朗なるに浮雲鱗然たるあるがごとし——如晴天爽朗有浮雲鱗然。雲のかたちを魚のうろこにたとえる。

一六 その沫は緑銭の水渭に浮かべるがごとし——其沫者若緑銭浮於水渭。緑銭とは水草の葉。渭びの字が正しいであろう。

一七 一椀喉吻潤い、二椀孤悶を破る。三椀枯腸をさぐる。惟うに文字五千卷有り。四椀軽汗を発す。平生不平の事ごとく毛孔に向かつて散ず。五椀肌骨清し。六椀仙靈に通ず。七椀吃し得ざるに也ただ覚ゆ而腋習々清風の生ずるを。蓬萊山はいづくにかある玉川子この清風に乗じて帰りなんと欲す。——一椀喉吻潤。二椀破孤悶。三椀搜枯腸、惟有文字五千卷。四椀発軽汗。平生不平事尽向毛孔散。五椀肌骨清。六椀通仙靈。七椀吃不得、也唯覚而腋習々清風生。蓬萊山在何処、玉川子乗此清風欲歸去。枯腸は文藻ぶんそうの乏しきを言う。習習は春風の和らぎ舒ゆるびるかたち。玉川子とは盧同自身をさす。

一八 関尹——関令尹かんれいいんぎ喜。周の哲学者、姓は尹、名は喜、関の守吏であつたので、関尹子と称せられた。

一九 Dr. Paul Carus 著、Taotei king.

二〇 トラスト——Trusts 購買組合の便宜を指すものであろう。

二一 公孫竜こうそんりゆうの「堅白論」「白馬非馬論」。

二二 予として冬川を渉るがごとく、猶として四隣をおそるるがごとく、儼としてそれ客のごとく、渙として冰のまさに积けんとするがごとく、敦としてそれ樸のごとく、曠

としてそれ谷のごとく、渾としてそれ濁るがごとし。——予兮若冬涉川。猶兮若畏四隣。儼兮其若客。渙兮若冰將釈。敦兮其若樸。曠兮其若谷。渾兮其若濁。（老子古之善為土章第十五）「予として」は前を見、後をおもんばかるの意。「猶として」は疑いて行かざるの意。渙は物の離散するをいう。敦は敦原の意。樸はあら木。渾は混に同じ、濁るかたち。

二三 慈、險、及不敢為天下先。（天下皆謂章第六十七）

二四 那伽闍刺樹那——釈迦没後七百年頃南インドに生れる。大乘經典を研究、その弘伝者として大乘諸宗の祖師といわれる。

二五 商羯羅阿闍梨——七八九年頃南インドに生れる。インド教の復興者、婆羅門哲学の大成者として知られる。

二六 無明——経験界。

二七 馥柯羅摩訶秩多——維摩経ではこの典拠不明。維摩居士のことか。

二八 利休が「富田左近とみたさこんへ露地のしつらい教うるとて」示したものは「檉かしの葉のみみじぬからにちりつもる奥山寺の道のさびしさ。」で、つづく歌は、千家流に伝える七事の式おきてがきの一つである。

- 二九 見渡せば……—藤原定家作。千家流に伝えられる七事式の法策書おきてがきの一つである。
- 三〇 夕月夜……—「茶話指月集」による。
- 三一 ハルンアルラシッド—『アラビアン・ナイト』（千一夜物語）の主人公。
- 三二 後撰集に僧そうじょう正遍へんじょう昭しょう作として同様のものがある。なお、ためよりあそんしゅう為頼朝臣集に「折りつれば心もけがるもとながら今の仏にはな奉る」とあり、こうみょうこうごう光明皇后の御詠として「わがために花は手折たおらじされどただ三世の諸仏の前にささげん」としたのもある。
- 三三 「天地不仁。」—原文は「仁とせず」あるいは「不仁ならんや」と読む人もあるがここには「仁ならず」として引用してある。
- 三四 大師作、『秘藏宝鑰ひぞうほうやく』の序より。
- 三五 梵—インドの波羅門教における最高原理。
- 三六 花をのみ……—藤原家隆作。利休はわびの本意としてこの歌を常に吟じておったとのことである。
- 三七 人生七十九ちゅうしちゅうじゅう圀希咄。吾が這の宝劍祖仏共に殺す—人生七十ちゅうしちゅう力圀希咄 吾這宝劍祖仏共殺。「力圀希咄」を「リキイキトツ」と読むのは、元禄げんろく十五年出版の、河

東散人りようそう 鵜う 巢そう が藤村庸軒ふじむらようけんの説話を筆録したという「茶話指月集」の読み方によつたものである。意味は徳川時代から茶人の間の問題となっていて、諸説紛々。今いま泉雄ずみゆうさく作氏の説では、禅の喝かつのような一種の間投詞で、「ええなんじやいの」といつた意味であるとのこと。京都表千家に伝えられている利休の真蹟には「人世」、力※となつている由である。また「禅林僧室伝」巻三、雲門文偃章下に、雲門偈ニ云ク、咄咄咄力※希禅子訝ル中眉垂ルとある。英文には、この語句の意味を思わせるところは表われていない。

# 青空文庫情報

底本：「茶の本」岩波文庫、岩波書店

1929（昭和4）年3月10日第1刷発行

1961（昭和36）年6月5日第38刷改版発行

2005（平成17）年11月5日第103刷発行

入力：kompass

校正：鈴木厚司

2008年6月6日作成

2014年4月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 茶の本

## 茶の本

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 岡倉覚三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>